

大間寺遺跡

大間寺遺跡発掘調査報告書

— 愛知郡秦荘町島川 —

1982

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

大間寺遺跡発掘調査報告書

——愛知郡秦荘町島川——

1982

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

210.2
M
61

序

滋賀県が行なう県道湖東目加田線工事予定地に大間寺遺跡が遺存しており、事前に発掘調査を実施することになりました。その結果、奈良時代を中心とする建物跡や条里制地割に関する遺構が数多く明らかにされました。これらは、愛知郡における条里制地割の方位と密接な関係にあり、近江湖東地方の古代史を解明するうえで貴重な資料といえます。本報告書はその記録であります。

この報告書により、郷土の文化財に対する認識や理解が高まり、さらに教育や学術的に少しでも役立つことを期待するものであります。

なお、当調査にあたっては滋賀県彦根土木事務所をはじめ多くの関係者の方々の御協力を得、さらに本報告書作成にあたり努力くださった方々にも合せて深く感謝の意を表します。

昭和57年3月

滋賀県教育委員会文化財保護課
課長 外池忠雄

目 次

はじめに

第1章 位置と環境.....	1
第2章 調査.....	6
1. 調査経過.....	6
2. 調査日誌(抄).....	6
第3章 遺構.....	10
1. 竪穴住居跡.....	10
2. 掘立柱建物.....	10
3. 棚跡.....	15
4. 方形周溝状遺構.....	17
5. 溝跡.....	17
6. 土壙.....	21
第4章 遺物.....	23
1. 遺物.....	23
2. 小結.....	30
第5章 考察.....	33
1. 建物の配置と時期.....	33
2. 溝の性格.....	34
3. おわりに.....	35

挿図目次

1. 大間寺遺跡位置図および周辺の遺跡	2
2. 大間寺遺跡周辺の愛知郡条里割地割図	4
3. 大間寺遺跡地形図および遺構位置図	6 - 7
4. N区掘削作業風景	7
5. N区発掘調査作業風景	8
6. 大間寺遺跡遺構実測図および柱状図	10-11
7. 堀立柱建物 (S B 101~103), 槽跡 (S A 1) 遺構実測図	11
8. 堀立柱建物 (S B 104, 105, 107, 108) 遺構実測図	13
9. 堀立柱建物 (S B 106), 穂穴住居跡 (S B 1), 上坡 (S K 1 ~ 4) 遺構実測図	14
10. 方形周溝状遺構実測図	16
11. 溝跡 (S D 2 ~ 6) 遺構実測図	17
12. 溝跡 (S D 7) 遺構実測図	19
13. 溝跡 (S D 1・8) 遺構実測図	20
14. 大間寺遺跡出土遺物実測図	24
15. 大間寺遺跡出土遺物実測図	25
16. 大間寺遺跡出土遺物実測図	29

表目次

1. 堀立柱建物一覧表	14
2. 溝跡一覧表	17

図版目次

1 位置 大間寺遺跡周辺航空写真	
2 遺構 1 調査地遠景 (東から)	
2 調査地全景 (北から)	

- 3 造構 1 N区 (南から)
2 S区 (北から)
- 4 造構 1 N-1区 (北から)
2 N-2区 (北から)
- 5 造構 1 N-3区 (南から)
2 S-1区 (南から)
- 6 造構 1 S B 1 (南から)
2 S B102, S D 2 (東から)
- 7 造構 1 N-1区建物群 (南東から)
2 S B102 (南から)
- 8 造構 1 S B103 (東から)
2 S B 1, S B103-104 (南から)
- 9 造構 1 S B105 (南から)
2 S B106~108 (南から)
- 10 造構 1 S B106 (東から)
2 S B106~108 (西から)
- 11 造構 1 S B107-108 (北から)
2 S B106柱穴断面 (北から)
- 12 造構 1 S A 1 (西から)
2 S A 1 (東から)
- 13 造構 1 方形周溝状造構 (北から)
2 方形周溝状造構, S K 1 (西から)
- 14 造構 1 S K 2・3 (東から)
2 S K 4 (東から)
- 15 造構 1 S D 1 (東から)
2 S D 3 (東から)
- 16 造構 1 S D 4・5 (東から)
2 S D 6 (東から)
- 17 造構 1 S D 7上層 (東から)
2 S D 7下層 (東から)

- 18 遺構 1 S D 8 (東から)
2 S D 8 (南から)
- 19 遺構 1 S D 4・5断面 (東から)
2 S D 8断面 (東から)
- 20 遺構 1 N-2区柱穴からの遺物 (14・15) 出土状況
2 N-2区包含層からの遺物 (24・26) 出土状況
- 21 遺構 1 N-1区トレンチ断面 (東から)
2 N-2区トレンチ断面 (東から)
- 22 遺構 1 N-3区トレンチ断面 (東から)
2 S-1区深掘部分断面 (東から)
- 23 遺構 1 S-2区深掘部分断面 (東から)
保存 2 遺跡保存の敷砂状況
- 24 保存 1 敷砂完了状況
2 保護マット敷つめ状況
- 25 保存 1 保護マット敷つめ完了状況
2 保存完了状況
- 26 遺物 S B105・106, S A 1, その他のPit, S K 1, 方形周溝状遺構, S D 5
- 27 遺物 S D 5, S D 6, S D 8, 遺物包含層

例　　言

1. 本書は滋賀県の実施する県道湖東目加田線建設工事に係る大間寺遺跡の昭和56年度発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県からの委託により滋賀県教育委員会の指導により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査および整理・報告は滋賀県教育委員会文化財保護課技師葛野泰樹が担当した。
4. 調査は次の構成で実施した。

事務局

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	外池忠雄
〃 課長補佐	藤本英策
〃 管理係長	林健次郎
〃 埋文係長	丸山竜平
〃 埋文技師	近藤 滋

(財) 滋賀県文化財保護協会

事務局長	江波弥太郎
事務主事	松本 幡弘

現地調査

京都産業大学O. B. 山中仁志、竜谷大学O. B. 徳網克己（以上調査員）

大阪学院大学学生：西村武史、京都学園大学学生：西川秀幸、佛教大学学生：西川健、林浩司、小杉昌史、京都工芸繊維大学学生：北村隆英、岐阜経済大学学生：岡治博之（以上調査補助員）

- なお、調査を実施するにあたり（財）滋賀県文化財保護協会嘱託調査員（現、蒲生町教育委員会技師）北川浩、佛教大学大学院吉谷芳幸氏の他、地元島川の方々の協力を得た。
5. 本報告書の編集は葛野が担当し、報筆は調査日誌（抄）を山中が、他を葛野が担当した。図面・遺物の整理・報告は山中の尽力があった。遺物写真にあたっては寿福滋氏の協力を得た。

はじめに

本調査は、県道湖東目加田線建設工事に伴う大間寺遺跡の発掘調査であり、道路は当遺跡の北西端を通過することになる。

当該地は今まで須恵器・土師器等の散布が知られており、小字に大円寺、寺西の名称がみられることから寺院跡ではないかと考えられていた。ただ、大円寺という小字名は本来大間寺ではないかと思われる。明応3年（1494）の『豊満神社記録』には「八木庄屋本七條九里坪大間寺之西」と「大間寺」の小字名がみえ、「大円寺」という名称はみあたらない。このことから、大間寺の「間」が「円」と後に誤記され今に伝わったものとみられる。そこで当遺跡の名称を大間寺遺跡とした。

大円寺、寺西の小字の残る地形は、湖東地方でみられる愛知郡条里と方向を異にし、南北を基準とするいわゆる古条里の方位をもつ。この古条里地割は当該地周辺に数多く存在し、そこに種々の遺跡を見る。これらは、湖東平野の開発を考究、究明する資料として各分野から注目されている。今回の調査でも古条里地割と方向を同一にする多数の樹立柱建物や溝跡を検出し、当地区的条里制地割もかなり古くまで遡ることが判明した。しかし、当初予想された直接寺院跡に隣接する造構は確認できなかった。

なお、湖東地方では現在、大規模ほ場整備事業が行なわれており、古来からの開発状況を知る条里制遺構や農業用水路が一瞬の間に新しい水田に変貌している。変貌するのは畔だけではなく、文化的、歴史的に意義高い小字名もその存在価値をなくし、すべて番号制による水田と化している。これも農業社会構造における日本歴史の流れであろうか。

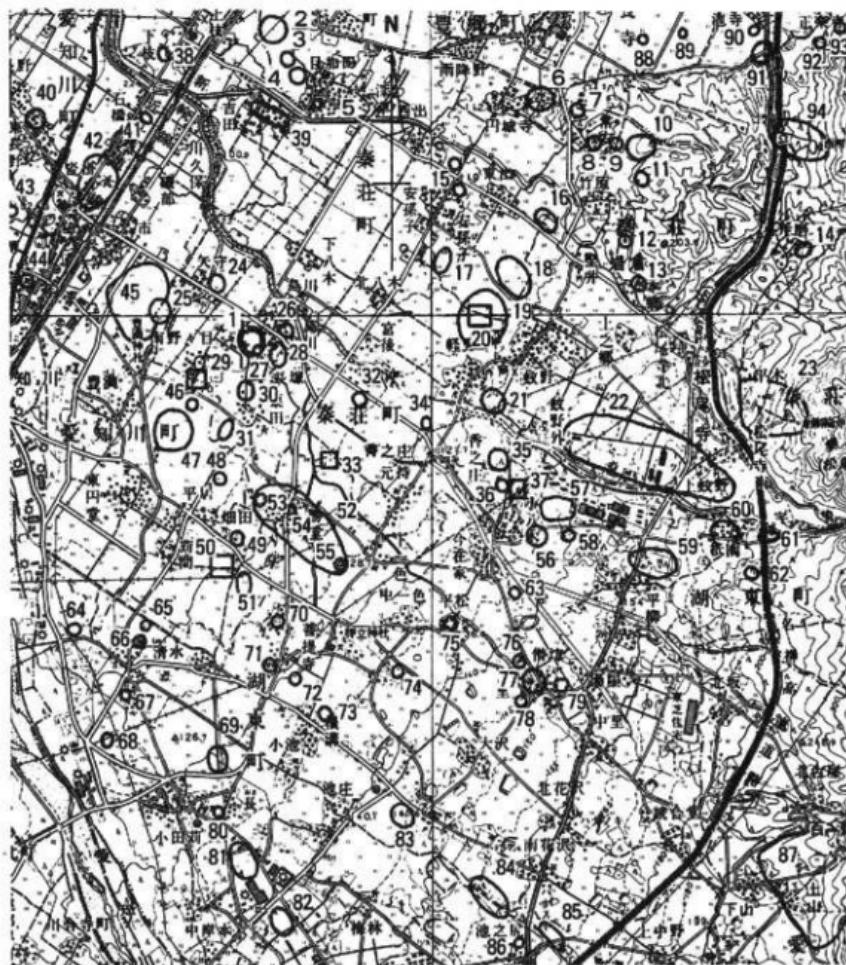
第1章 位置と環境

大間寺遺跡は滋賀県愛知郡秦荘町大字島川字大円寺、寺西に所在し、湖東平野のはば中央を西流する愛知川と犬上川の中間に流れる宇曾川の南側に位置する。当該地は鈴鹿山脈よりつづく扇状地が緩斜面に変り、さらに標高110m付近より低位扇状地と移行する転換地にあたる。すなわち、宇曾川により形成された舌状のびる扇状地の先端に位置し、当該地の北および北西側は約0.6m低くなる。

この付近は愛知郡条里と呼称されている条里制地割では7条9里に相当し、現在もその景観をよくとどめている。その中にあつて当遺跡は、愛知郡条里である統一条里制地割と方向を異にし、いわゆる「古条里制地割」と考えられている南北地割を基準としている。古条里制地割は当遺跡を含めた周辺に数ヶ所散見でき、いずれもそこに寺院跡や水田造構をみる。すなわち、当該地の南東約0.6mに野々目廃寺^①が遺存し、その南方約1.7kmに畠田廃寺^②がある。また、当該地の東方1.9kmには軽野塔^③の塚が、南東約1.3kmに妙圓寺遺跡^④が、東南東約2.8kmに小八木廃寺^⑤が、北方約2.2kmに目加田廃寺^⑥がそれぞれ位置する。これらはいずれも白鳳期から奈良、平安時代の瓦、土器等を出土し、1町から2町四方の寺域をもつ寺院跡とえられている。さらに、畠田廃寺の遺存する愛知川町畠田から湖東町清水中にかけては古条里制地割をもつ水田をみる。これは、古代より連續とうけつがれた農業用水路である愛知井^⑦によって水田化された所産とみられ、当地に、東大寺や興福寺の寺領が存在することを文献から知ることができる。

古墳時代では当遺跡の南側隣接地に前方後円墳と推定されている長塚古墳があり、野々目廃寺隣接地からは塙葬墓とみられる6世紀後半の塙原古墳^⑧が検出されている。長塚の南方0.4kmの栗田から横穴式石室を内部主体とした2基の古墳(栗田西遺跡)^⑨が確認され、その南方約1.5kmには円墳48基(現存8基)の勝堂古墳群や北蒲古墳群、下一色古墳群^⑩がある。東方には塙起古墳、狐塙古墳や県下有数の規模をもつ金剛寺野古墳群円墳298基が遺存する。さらに、当該地の約2kmには堅穴住居跡を中心とする軽野正境遺跡があり、当地方の集落跡の構造を知る上で貴重な遺跡である。目を西方にむけると、当該地の北西約2kmの中山道沿いに山塙古墳^⑪が1基あり、山塙古墳から南方の沓掛、長野、市、豊満にかけては古墳時代から平安時代の遺物が多量に散布しており、注意される遺跡の分布状況を示している。

なお、愛知郡条里制地割については早くから歴史地理学の方面からも注目され、種々の



第1図 大同寺遺跡位置図および周辺の遺跡(S=五万分の一)

愛知町

- 大間寺遺跡
- 古戸遺跡
- 日加印城遺跡
- 竹ノ尻遺跡
- 日加田遺跡
- 常安寺北遺跡
- 二子塚遺跡
- 常安寺南遺跡
- 高坪山遺跡
- 光林寺遺跡
- 竹原谷遺跡
- 金台寺遺跡
- 芦原遺跡
- 安藤子遺跡
- 深田遺跡
- 猪俣遺跡
- 毛人堂遺跡
- 狩野遺跡
- 軒野遺跡
- 松野塔ノ塚
- 輕野正権遺跡
- 金剛輪寺遺跡
- 金剛輪寺遺跡
- 矢守城遺跡
- 矢守遺跡
- 報恩寺遺跡
- 長塚遺跡
- 鳥川遺跡
- 野々口遺跡
- 野々口廻寺
- 栗田城遺跡
- 栗田遺跡
- 樂山遺跡
- 峯原遺跡
- 元持遺跡
- 孤塚遺跡
- 妙圓寺遺跡
- 大藏塚遺跡
- 小八木廻寺遺跡

豊郷町

- 觀音堂遺跡
- 古田城遺跡

愛知川町

- 福光寺遺跡
- 山塚遺跡
- 皆根遺跡
- 久遠寺遺跡
- 宝満寺遺跡
- 市遺跡
- 塙原遺跡
- ミグリシ遺跡
- 平井北遺跡
- 柳川北遺跡
- 畠田遺跡
- 畠田廻寺
- 畠田福奇遺跡

湖東町

- 稻堂遺跡
- 北浦遺跡
- 勝堂横穴遺跡
- 下一色遺跡
- 小八木遺跡
- 木戸口遺跡
- 小八木東遺跡
- 千鶴遺跡
- 武田遺跡
- 祇園來遺跡
- 新池遺跡
- 今在家遺跡
- 石塙遺跡
- 塙原遺跡
- 瑞光寺遺跡
- 大塚遺跡
- 塙原遺跡
- 大日清遺跡
- 北菩提寺遺跡
- 菩提寺遺跡
- 南菩提寺遺跡
- 平塚遺跡
- 鍋塚遺跡
- 千松城遺跡
- 天神遺跡
- 下里遺跡
- カイゴメ遺跡
- 僧坊遺跡
- 小田刈遺跡
- 中岸本遺跡
- 高塚遺跡
- 兼善堂遺跡

愛東町

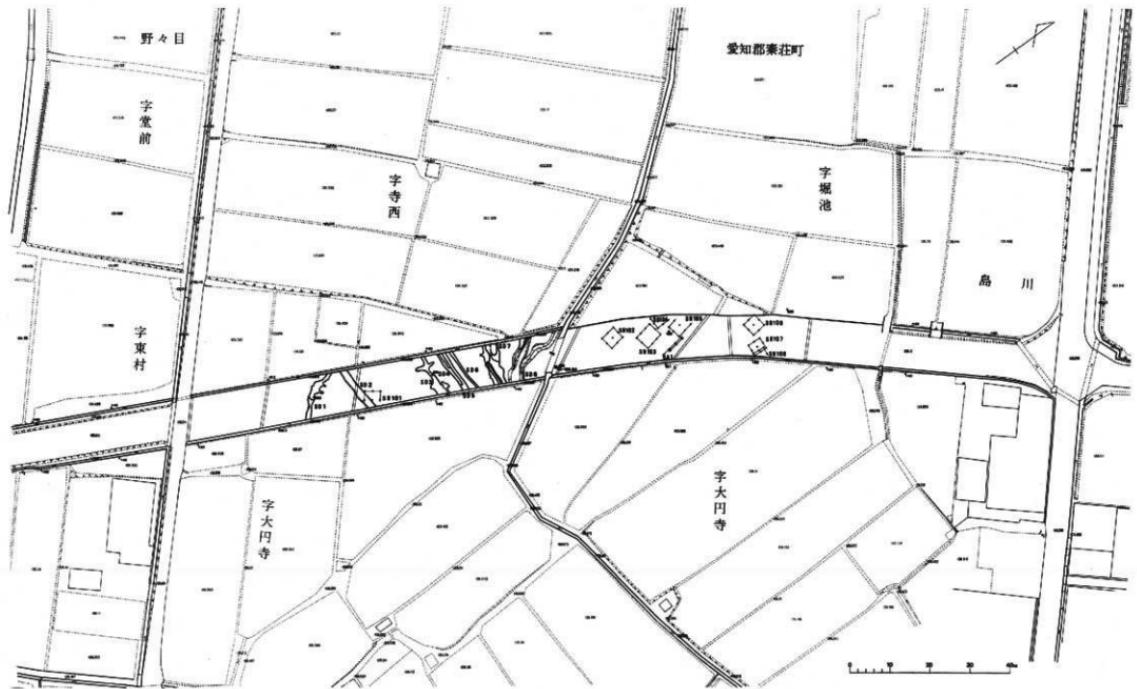
- ハツ塚遺跡
- 上田遺跡
- 池の尻遺跡
- 百濟寺遺跡

甲良町

- 横枕遺跡
- 四ツ塚遺跡
- 堀之内遺跡
- 寺道遺跡
- 狐塚遺跡
- 勝樂寺山遺跡
- 西明寺遺跡



第2図 大間寺遺跡周辺の愛知郡条里制地割図



第3図 大円寺遺跡地形図および追構位置図 (1/1000)

考察がなされているが、今なお明確な解答は得られていない。考古学的見地からの考究が
またれている。

註

- ① 昭和52～53年発掘調査
- ② 昭和53年発掘調査
- ③ 昭和53年発掘調査
- ④ 近藤 滋「小八木庵寺調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ⑤ 小林健太郎・高橋誠一「愛知川扇状地北半部の地形と農業水利」(『滋賀大学教育学部紀要』27号 滋賀大学教育学部 昭和52年)
- ⑥ 昭和53年発掘調査
- ⑦ 昭和53年発掘調査
- ⑧ 田中勝弘・近藤 滋「愛知郡秦荘町コクヨ敷地内古墳調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度 滋賀県教育委員会 昭和50年)
近藤 滋「秦荘町上蚊野古墳群」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-1 滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和52年)
- ⑨ 近藤 滋・石橋正嗣・石原道洋「蛭野正境遺跡発掘調査報告書」(秦荘町教育委員会 昭和54年)
- ⑩ 前掲書④
谷岡武雄・小林 博・日下雅義「愛知川中・下流域における中世の土地開発と豪族屋敷」(『歴史地理学紀要』5 昭和38年)
中野栄夫「近江国愛智莊放地における開発と遷滅」(『地方史研究』138号 昭和50年)
高橋誠一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」(『滋賀大学教育学部紀要』27号 滋賀大学教育学部 昭和52年)

第2章 調査

1 調査経過

本調査での割付けは県道工事予定内のみを調査対象としたため、便宜的に道路予定地の中央を東西に流れる排水路を中心 S 区、N 区に区切り、用水路にあわせて南へ仮 S-1 ~ 3、北へ仮 N-1 ~ 3 と仮区割りをし、詳細に区割りをする必要から、排水路の東西幅中心と S-3 用水路幅の中心とを結ぶ中軸線を基準に排水路幅中心点を 0 点とし 30m 方眼に大区を決め、さらに 3 m 方眼の小割付けを行なった。

なお、調査実施に先立ち水田耕作の関係から、当該地に農業用水路を確保する必要が生じ、立ち会い調査を実施した。その結果、遺構は現水田面より約 0.5 m 下層に存在することが判明した。このため、農業用水路は遺構面を削平しないよう敷設された。

S 区 この地区は小字大間寺・寺西にあたり現畦畔は統一条里制地割に方向を揃える。標高は N 区より約 0.5 m 低く、土質は褐色粘土層の上に黒ボク層が堆積し軟弱である。検出された遺構は掘立柱建物 1 棟と溝 8 条である。

N 区 小字大円寺の北端に位置する。遺構面は黒ボク層および茶褐色粘土層をベースとしており、竪穴住居跡 1 棟、掘立柱建物 7 棟、柵跡 1 棟、方形周溝状遺構等を検出した。検出した掘立柱建物の柱穴は直径 0.3 m から 1 m におよぶものがあり、建物の方位はいずれも南北方向に揃え、条里制地割りとの相関関係が注目される。また、N 区は S 区と比して水捌はよく、竪穴住居跡の存在から居住区として立地的に良好であったことがうかがえる。

2 調査日誌（抄）

6月2日 本日より愛知郡秦荘町鳥川、大間寺遺跡の発掘調査を開始する。調査地区中央の排水路を基準とし、S・N 区に 2 分し、各用水路ごとに仮区を設定する。ユンボーにて仮 N-1 区掘削作業。水田下層より遺物包含層となる。

6月3~6日 ユンボーにて仮 N-1~3・S-1 区掘削作業。遺構面（黒ボク土層）追求。S 区は N 区より土質は軟質ぎみである。

6月8日 仮 N-1 区遺構検出作業。北側で直徑約 0.6 m のピット数個検出。暗褐色粘土層（包含層）より土器多数出土。現水田面より 0.4~0.5 m に遺構面をみる。

6月9・10日 仮N-2区遺構面追求作業。暗褐色粘土層の下層より黒色土層検出。遺構面と思われる。遺物の出土量は少ない。

6月16・17日 仮N-1・2区遺構検出作業。両区でピット多数検出。集落跡であろうか。須恵器の出土が多い。

6月18・19日 調査用割り付け作業。調査地区中央の排水路中央を0点とし、30m間隔に南北へ基準線を設け、北へN1, 2…、南へS1, 2…、東にA、西にBと番号をつけた30m方眼の大区を設定し、大区をさらに3m方眼にグリッドを設定し小区とし、西北隅を1、東南隅を100とした。

6月20~22日 梅雨にたたられる。しかし、現場にはあまり水は溜らない。

6月23~25日 仮N-1区遺構検出作業。直径約0.2~0.6mの大小ピット多数検出。埋土は黒色・黄褐色粘土混合層で、黒ボク土層及び地山（明褐色粘土層）を切り込む。

6月29・30日 仮N-1区遺構検出作業。地山を切り込む黒色粘土のピット多数検出。

7月2日 仮S-1区断面清掃。S区からはピットはいまだ確認されない。

7月3~5日 またもや梅雨にたたられる。だが梅雨明け間近。水田の緑が目にしみる。

7月6・7日 仮S-2区遺構検出作業。溝跡2条検出。南からSD1, 2…と番号を付ける。

7月8日 SD2掘り下げ作業。深さ約0.2mで鉄分沈殿層を確認する。素掘りの溝のようである。

7月9・10日 SD1掘り下げ作業。仮S-1区遺構検出作業。依前ピットは確認できず、溝のみを検出する。



第4図 N区掘削作業風景

7月11～13日 仮S-1区遺構検出作業。2間×1間以上の建物（SB 101）と、溝跡6条を検出。N区ほどピットはない。仮S-2区実測用削り付け作業。

7月14～17日 SB 101 掘り下げ作業。仮N-2・3区遺構検出作業。N-2区にて土壙3基（SK 1～3）、溝状遺構2条、ピット多数を、N-3にて2間×2間の建物（SB 106）を検出。倉庫跡か。仮S-2区平面及び断面実測作業。

7月18～21日 SD 3～7掘り下げ作業。SD 5より須恵器多量出土。

7月22～28日 SD 8 掘り下げ作業。7世紀末の須恵器と中世染付椀等出土。

7月23日 当該地周辺の平板測量（※：8月3日まで）。

7月27～8月3日 仮N-1区遺構検出作業及び建物の追求。仮N-2区ピット等の掘り下げ作業。真夏日が続き、体力の限界に挑戦する。

8月5日 仮S-1・2区写真撮影。

8月7日 仮S-1区実測用削り付け作業。仮N-3区ピット掘り下げ作業。

8月8～12日 仮N-1区ピット掘り下げ作業。N区断面実測作業。

8月17・18日 仮N-3区SB 106追求。掘形の雄大きさに比べ、柱痕は直径約0.15mを測り柱径は小さい。

8月19日 仮N-1区竪穴住居跡（SB 1）追求。柱穴は確認できず。仮N-3区土壙（SK 4）掘り下げ作業。仮S-1区断面実測作業。

8月19～22日 N区トレンチ西側拡張作業。建物跡の追求。

8月31日～9月3日 N区遺構の写真撮影。仮S-1区平面実測作業。残暑きびしく画面に汗がしたたり落ちる。しかし、時おりふく風に秋の気配を感じる。



第5図 N区発掘調査作業風景

9月5～11日 台風の影響を2度も受けて、全体写真のための清掃を何回となくやり直す。太陽の次は雨に泣く。

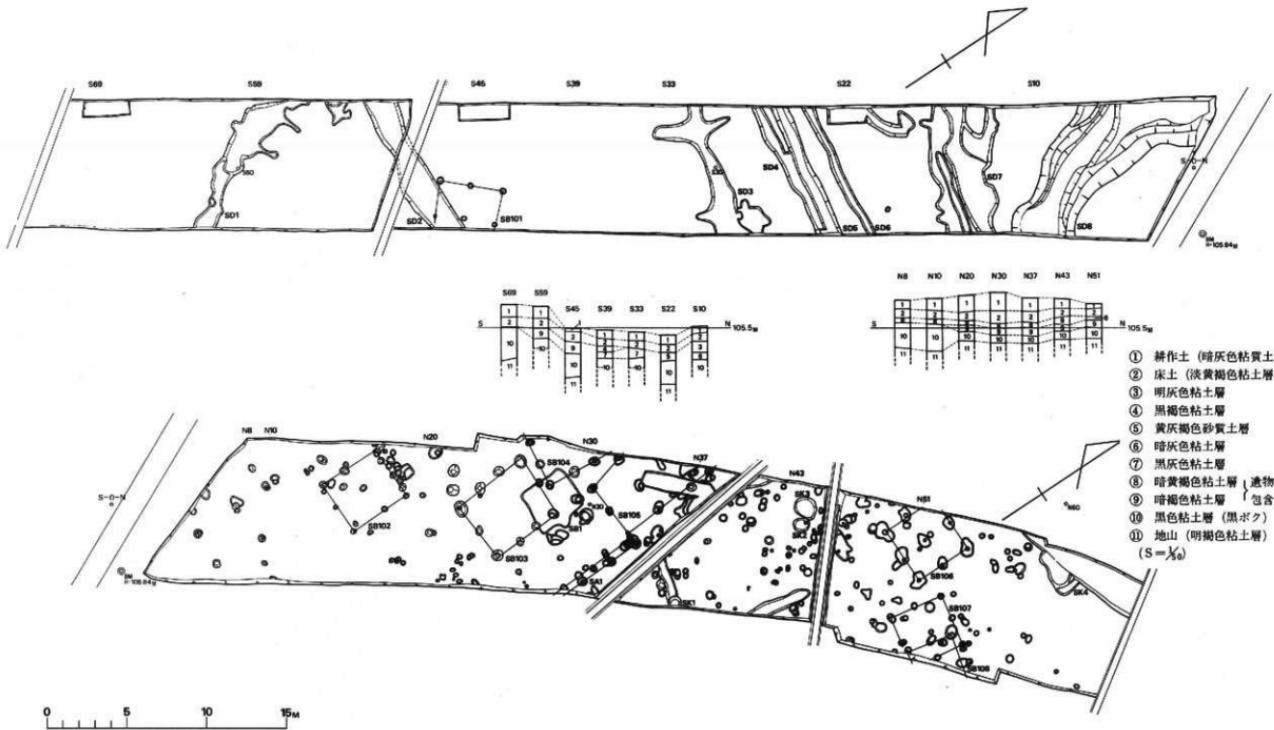
9月12日 假N-1区にてS B 102～105を確認。建物の方位をほぼ南北にそろえる。

9月14～16日 N区実測用割り付け作業。

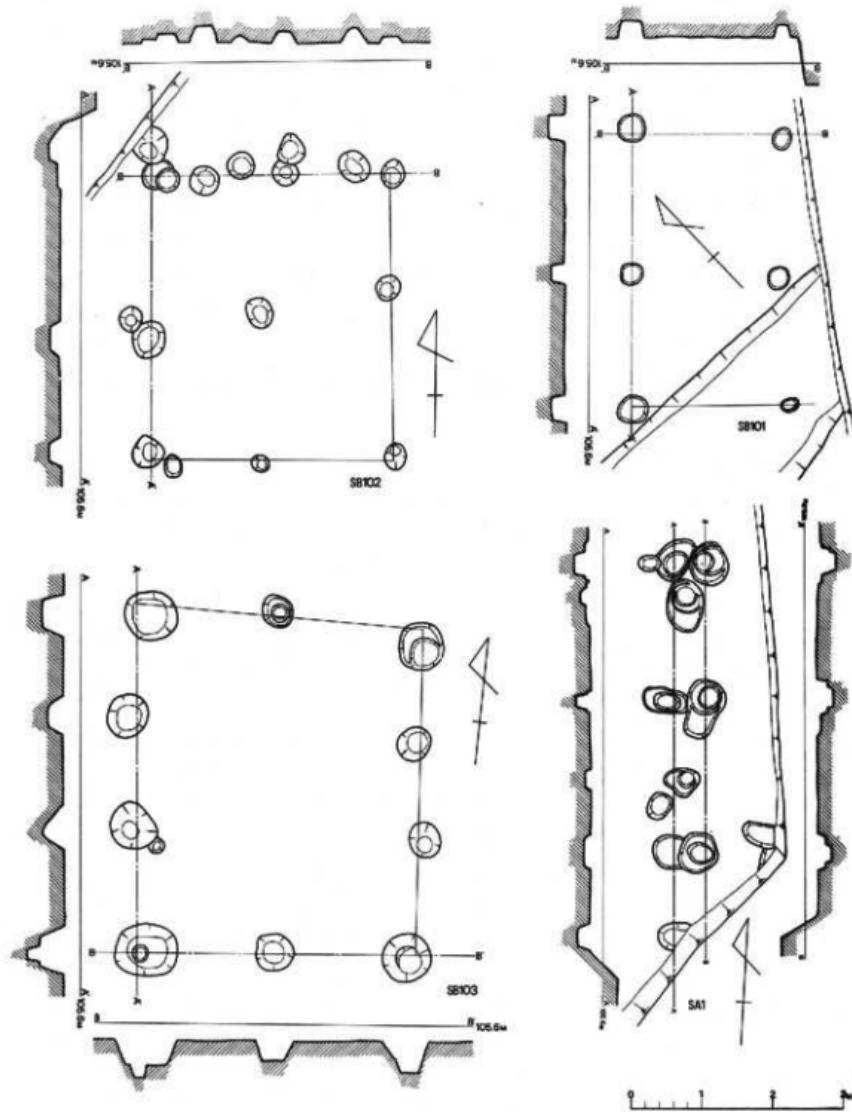
9月17～22日 N区平面実測作業。調査開始時は青々としていた水田も、今は黄金色に輝き、月日の流れを感じる。一部で刈り取りが行なわれている。

9月24～29日 假N-3区S B 107・108を確認。また、假N-2区の溝跡は、N-1・3区にのび方形周溝状造構となる。

9月30日 造構の再確認を行い、本日をもって現地調査を完了する。湖東平野では稻の刈り取りが盛んである。整理作業、および、報告書作成業務に精力を注ぐ。



第6図 大間寺遺跡構造実測図 ($S = \frac{1}{200}$) および柱状図 ($S = \frac{1}{60}$)



第7図 掘立柱建物、柵跡遺跡構実測図

は南北1.62~2.3m、東西1.5~1.88mと等間ではないが、総長は各柱列ともほぼ揃い、柱筋の方向も揃う。方位はN 1°27'Wを示す。

なお、北側柱列付近には他に多数の柱穴がみられ、SB 102の北側に建物が存在する可能性をもつ。

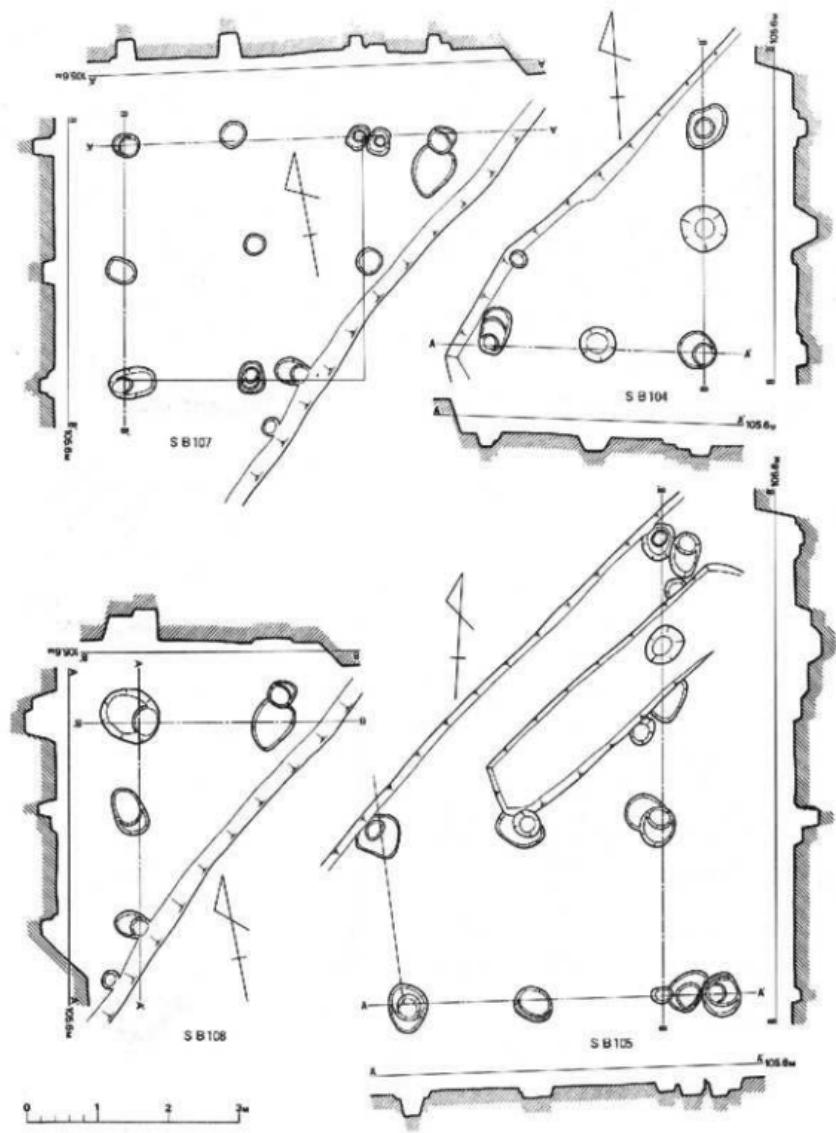
SB 103 SB 102の北東3mに隣接する桁行3間(4.41~4.83m)×梁行2間(3.8~4.16m)の南北棟の建物である。柱穴はすべて円形で直徑0.45~0.8mを測り、四隅の柱穴が特に大きい。柱痕は直徑約0.25mの円形を呈する。柱間は桁行は南側柱間が広く北側ほど狭くなる。すなわち、南側より第1柱間は1.65~1.75m、第2柱間は1.46~1.58m、第3柱間は1.3~1.5mを測り、総長では東側柱列の方が約0.4m短かい。梁行は東側柱間が広く南側柱列で0.06m、北側柱列で0.29mの差をみる。柱筋は各柱列ともよく揃うが北側裏の中央柱のみ少しずれる。方位はN 2°27'Wを示し、SB 102より1度西へ振る。

SB 104 SB 103の北側0.3mに隣接する南北2間以上(3.06m以上)×東西2間以上(3.2m以上)の建物で、北半は調査対象地外へのびる。柱穴は円形を呈し、0.5~0.65mを測り、柱痕は0.25mを測る。柱間は南側柱列は1.53mの等間であるのに対し、東側柱列は1.42~1.78mを測り不揃いである。方位はN 4°43'Eを示し、SB 103より約7度東へ振る。

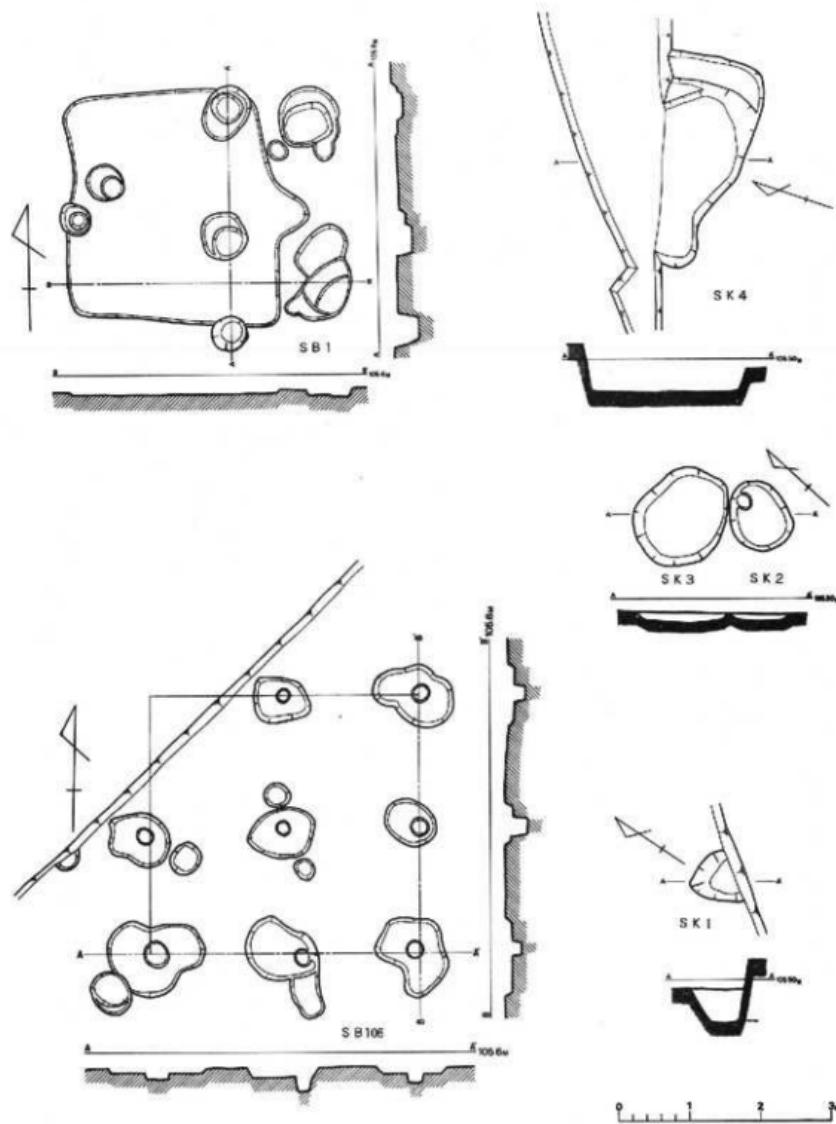
SB 105 SB 103の北東3m、SB 104の東側に隣接する建物で、SB 103の東側柱列の延長線上にSB 105の西側柱列がある。規模は南北3間以上(6.53m以上)×東西2

表1 捕立柱建物一覧表

No.	桁行×梁行	規模(平均m)	方 位	柱門の規模	備 考
SB 101	2間以上 ×1間以上	3.89× 2.15	N 43°23' E	25~30cm	• SB 2より古い。
SB 102	2間×2間	3.997× 3.427	N 1°27' W	25~40cm 35cm程度多い	• 四隅の柱形は大きい(直徑約80cm)。
SB 103	3間×2間	4.673× 3.998	N 2°27' W	45~80cm 柱痕25cm	
SB 104	2間以上 ×2間以上	3.2× 3.06	N 4°43' E	50~65cm 柱痕25cm	
SB 105	3間以上 ×2間以上	6.53× 3.785	N 4°07' W	50~65cm 柱痕25~30cm	• 柱痕の邊齊度は良い。
SB 106	2間×2間	3.64× 3.76	N 0°17' W	80~120cm 柱痕15~25cm	• 柱形は方形に近い。 • 柱形の邊齊度に拘り柱筋が4種ほどの小さい。
SB 107	2間× 2間以上	3.445× 3.45	N 9°53' E	35~50cm 柱痕15~20cm	• SB 108と重複。
SB 108	2間以上 ×1間以上	2.92× 1.86	N 13°23' E	50~75cm 柱痕25cm程度	• SB 107と重複。



第8図 据立柱建物遺構実測図



第9図 掘立柱建物、竪穴住居跡、上層遺構実測図

間（3.49・4.08m）の南北棟の建物で、北側は調査対象地外にのびる。柱穴は0.5～0.6mを測り、柱痕はほとんどの柱穴に遺存し直径0.25～0.3mである。柱穴の形態はSB104に似る。柱間は東側柱列で1.56～2.52mを測り約1mの差をもつ。南側柱列は1.72・1.76mとほぼ等間であるが、南側より第2列は1.92・2.16mを測り不揃いである。さらに総長に約0.6mの差を見る。柱筋は西側柱列を除けばよく揃う。方位は東側柱列でN 4°07'Wを示し、SB103より1度40分西へ振る。

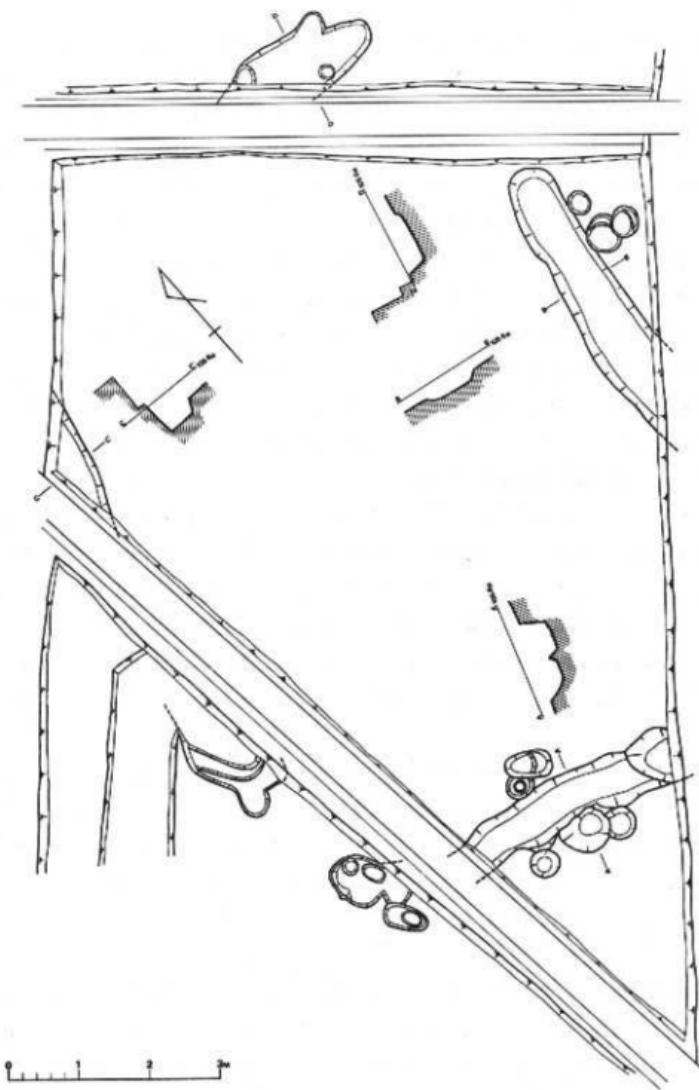
SB106 SB105の東方約11mのS-3区に位置する。規模は南北2間（3.64m）×東西2間（3.65・3.87m）の建物で、平面方形に近い。柱穴は平面隅丸方形に近く1辺0.8～1.2mを測り、柱痕は直径0.15～0.25mの円形を呈する。柱痕最深部で0.7mを測る。柱間は南北柱列で1.66～1.86m、東西柱列で1.6～2.05mを測り不揃いであるが、各柱列の総長は南北で3.64m、東西で3.65～3.87mを示し、比較的揃う。柱列の平均値を求めれば南北3.64m、東西3.76mとなり、東西方向がわずか0.12m長くなる。方位はN 0°17'Wを示し、当建物群中最も磁北に近い。

SB107 SB106の東側に隣接する建物で、SB108と東半で重複する。規模は南北2間（3.42・3.47m）×東西2間以上（3.4m以上）の建物で、建物の東側は調査対象地外にのびる可能性をもつ。柱穴は円形と呈し直径0.35～0.5mを測り、柱痕は0.15～0.2mである。柱間は南北1.62～1.85m、東西柱間1.52～1.84mを測り不揃いであるが、各柱列の総長は3.42～3.5mと同値に近くなる。この建物が2間×2間におさまれば平面方形形状を呈する。方位はN 9°53'Eを示し、SB106より約10度東へ振り、SB104より約5度東へ振る。

SB108 SB107と重複する建物である。規模は南北2間以上（2.92m以上）×東西1間以上（1.86m以上）で大半は調査対象地外にある。柱穴は円形を呈し直径0.5～0.75mで柱痕は約0.25mを測る。柱間は西側柱列で1.44・1.48mを測りほぼ等間で、北側柱列は1.86mである。方位はN 13°23'Eを示し、SB107より3度30分東へ振る。

3 標 跡 (第7図、図版12)

本調査ではN-1区北端より南北にのびる柵跡を1棟（SA1）検出した。SA1は柱穴の重複状況から建て替えが行なわれたとみられる。新旧の間隔は0.5mで、西側の柵跡が先行する。方位は両者同値でN 1°36'40"Wを示す。先行する柵跡はSB105の南東隅柱穴と接し、それより南方へ3間以上（5.41m以上）のびる。柱間は北から1.3・2.15・1.96



第10図 方形周溝状造構実測図

mを測り不揃いである。柱穴は平面橢円形を呈し0.5~0.7mで、柱痕は直径0.3mの円形である。新しい櫛跡は先行する櫛跡に平行し、やはりSB 105の南東隅より南方へのびる。規模は2間以上(4.16m以上)あり、柱間は北から2.21・1.95mと不揃いである。柱穴は平面円形を呈し直径0.5~0.6mで、柱痕は0.3mを測る円形である。両櫛跡に最も近接する方位をもつSB 103より0度51分東へ振り、近接するSB 105より2度31分東へ振り。

4 方形周溝状遺構(第10図、図版13)

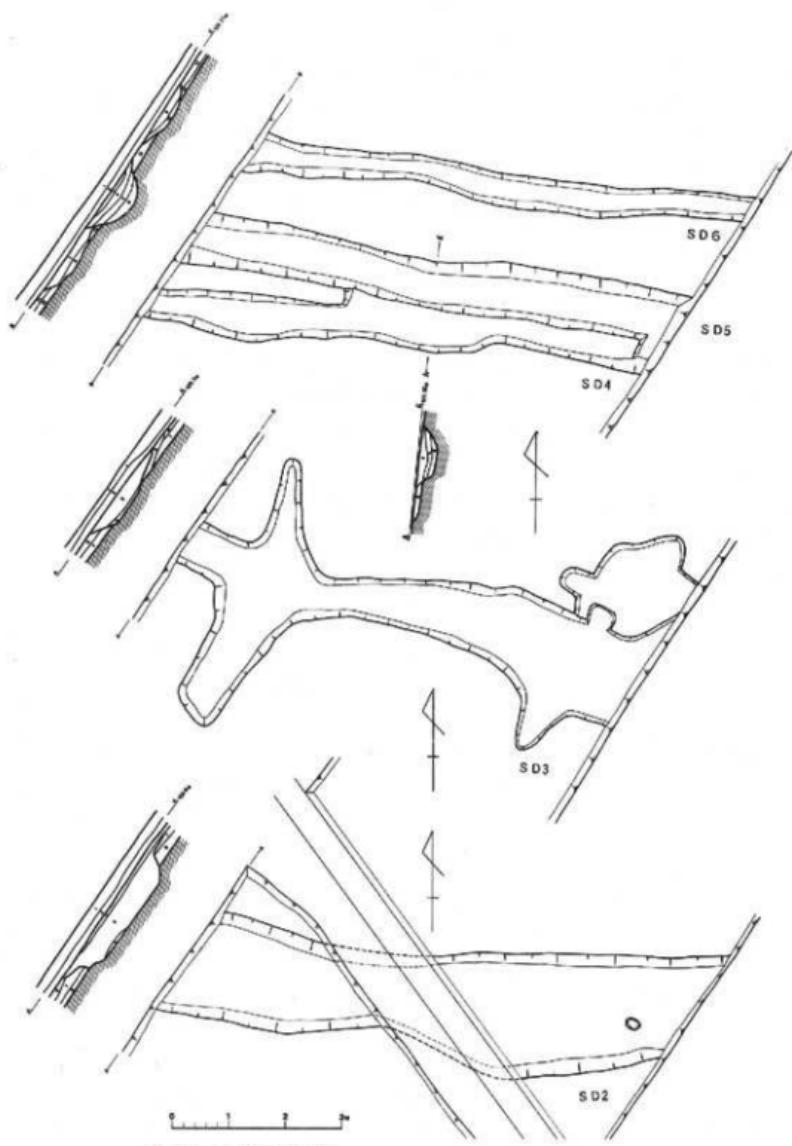
N-2区を中心に方形周溝状にめぐる幅約0.8mの溝を検出した。溝の遺存度は低く最深部で0.25mを測る。溝はコーナーの2方が調査対象地外になるため明確にはとらえられないが、検出した2方はとれる。心々距離は南北約10.9m、東西約7.8mを測り、平面長方形を呈する。溝の断面はU字形に近く、底部は凸凹の激しい部分とそうでないところがある。なお、溝でとり囲まれた内部空間からは溝と直接関連する遺構は確認できなかった。出土遺物は少なく、土器から遺構の性格を考えることは困難である。

5 溝 跡(第11~13図、図版15~19)

溝は合計8条(SD 1~8)を検出した。すべてS区に遺存し、その形態・方位から3形態に分けられる。I形態は方位を東西にもち、壁面が直線的にのびるもの(SD 2・4

表2 溝跡一覧表

分類区分	No.	地盤(m)	幅(m)	深さ(m)	方位	断面形	備考
I	SD 2	9.1以上	1.8~2.2	0.22	N86°37'W	一	• SB 101より新しい。 • 既存段階が証明される。
	SD 4	9.0以上	0.6~0.8	0.12	N85°37'W	U	• SD 5より古い。
	SD 5	8.6以上	1.0	0.30	N80°57'W	U	• SD 4より新しい。 • 土器の出土が多い。
	SD 6	9.0以上	0.5	0.10	N83°17'W	U	
II	SD 3	8.6以上	0.8~1.3	0.10	N77°47'W	U	
	SD 7	8.0以上	3.3~4.0	0.22	N64°07'W	不定形	• 上器の出土が多い。
III	SD 1	10.0以上	0.8~2.2	0.13	N31°27'W	U	
	SD 8	9.0以上 (13.0)	4.0~5.2	0.80	N25°47'W	U	• 北壁大きくカーブする。



第11图 满阶造构实测图

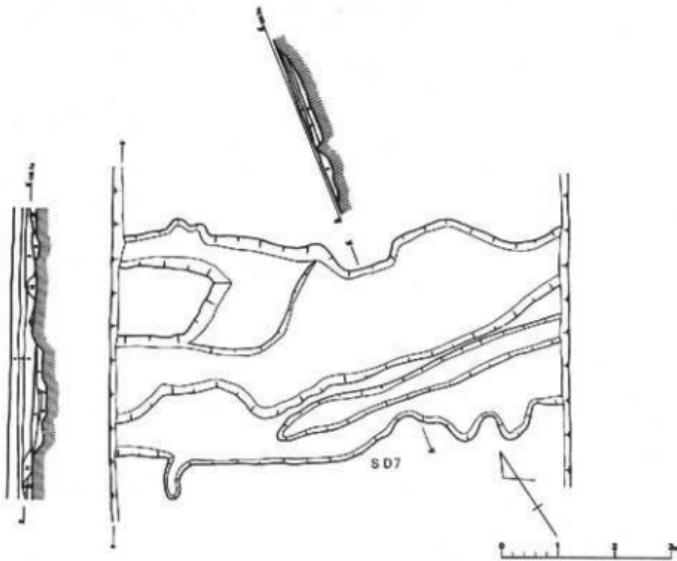
～6), II形態は方位を東西にもち、壁面が不均整なもの(SD3・7), III形態は方位を南北にもち、壁面が不均整なもの(SD1・8)の3形態である。

(I形態)

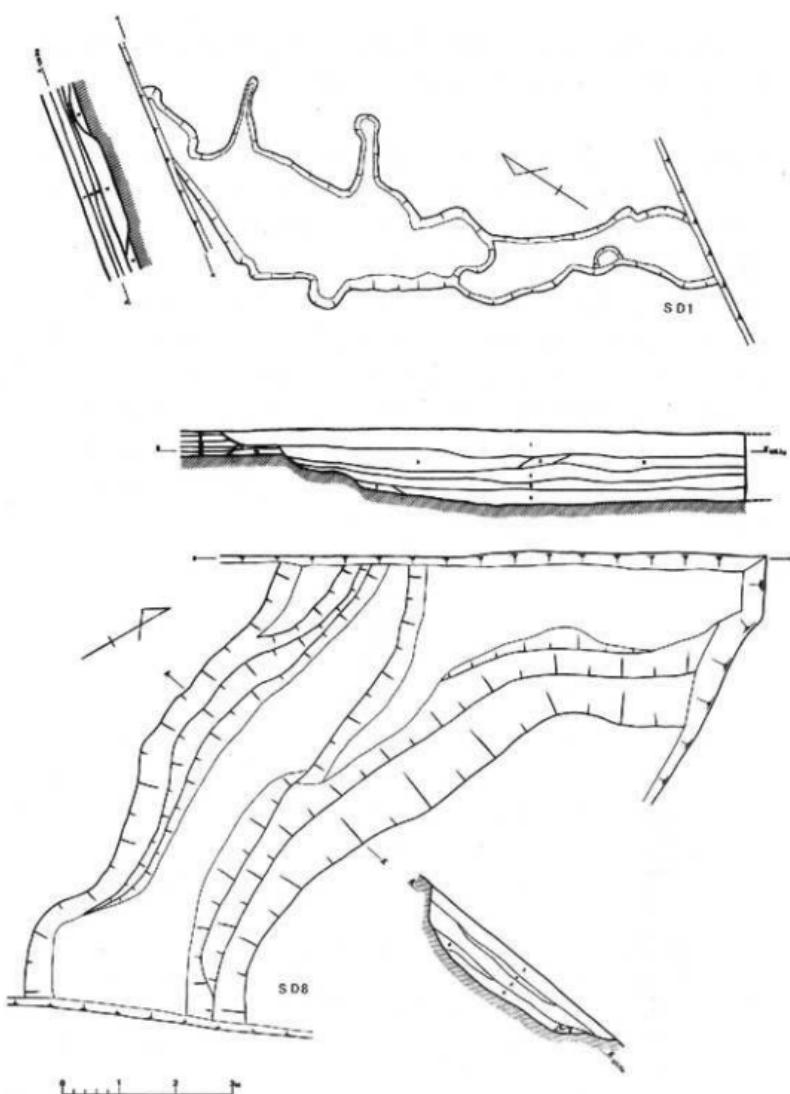
SD2 S-1・2区にまたがり検出した溝でSB101と重複しSB101を切る。溝幅1.8～2.2m, 残存高0.22mを測り、断面は一状を呈し、方位はN86°37'Wを示しほぼ東西方向に流れる。底部は平坦で底部全面に厚さ約2cmの鉄物沈殿層が堆積する。埋土は淡灰褐色粘質土層で、現水田床面直下より溝は始まる。土師器細片が数点出土する。

SD4 S-1区中央部を東西方向に流れる溝で、SD5と重複しSD5より先行する。溝幅は0.6～0.8m, 残存高0.24mを測り、断面U字形を呈し底部は丸味をおびる。壁面はやや凸凹するがよく整う。方位はN85°37'Wを示す。素掘りの溝である。

SD5 SD4と重複する溝で、方位はN80°57'Wを示しSD4より約5度北へ振る。溝幅は1.0m, 残存高0.48m, 断面U字形を呈し底部は丸味をおびる。壁面はよく整う。当溝からは今回検出の遺構中最も多量の遺物の出土をみた。須恵器・土師器等総数で約100点を数える。素掘りの溝である。



第12図 溝跡遺構実測図



第13図 溝跡遺構実測図

S D 6 S D 5 の北方約 2.0 m に S D 5 と平行して流れる溝で、方位は N 83° 17' W を示し両者の差は約 2 度である。溝幅は約 0.5 m、残存高 0.22 m を測り、断面 U 字形に近く底部は丸味をもつ。出土遺物は約 60 点を数え、須恵器、土師器の細片が特に多い。

〈Ⅱ形態〉

S D 3 S D 4 の南側約 5 m を流れる溝で、壁は不規則に凸凹する。溝幅は 0.8 ~ 1.3 m で最大 5.0 m まで広がる。残存高 0.31 m を測り、断面は丸味をおびる。方位は N 77° 47' W を示し S D 4 より約 8 度北へ振る。須恵器の細片が数点出土した。

S D 7 S D 6 と S D 8 の中央部を流れる溝で、壁は非常に不規則で埋土も上下 2 層に大きく分かれる。幅は 3.3 ~ 4.0 m、残存高 0.26 m を測り、断面は不定形で底部の凸凹が著しい。方位は N 64° 07' W を示す。溝の底部より少量の遺物が出土する。

〈Ⅲ形態〉

S D 1 S - 2 区中央部より検出した溝で、壁面は不規則で凸凹が激しい。溝幅は 0.8 ~ 2.2 m で最大 3.5 m まで広がる。残存高は 0.28 m を測り、断面は丸味をおびる。方位は N 31° 27' W を示し、南東より北西方向へ流れる。なお、当溝より南側には造構はなく、大間寺遺跡の南西限とみられる。

S D 8 S - 1 区北隅より検出した溝で、溝中最大規模をほこる。幅は 4.0 ~ 5.2 m、残存高は最深部で 1.3 m を測る。断面は U 字形を呈し、壁面に 2 ~ 3 段の棱線がみられる。南壁の一部にオーバーハングする部分がある。方位は N 25° 47' W を示すが、北壁は北側へ大きくカーブする。出土遺物は中位層より上部ではなく、最下層より須恵器・土師器に混じて中世陶磁器類が出土した。

6 土 坑 (第 9 図、図版 13 · 14)

検出した 4 基 (S K 1 ~ 4) の土坑はすべて N 区に位置し、S K 1 ~ 3 は N - 2 区にある。

S K 1 N - 2 区の方形周溝状造構の南側溝を切り込む土坑である。平面円形を呈するとみられ、直径 0.8 m、深さ 0.47 m を測り断面 U 字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土層で須恵器・土師器の細片が小量出土する。

S K 2 S B 105 · 106 の中央部に位置し S K 3 と接する。平面梢円形を呈し、直径 0.8 × 1.0 m、深さ 0.1 m を測り断面 U 字形を呈する。底部は平坦に近い。埋土は暗灰褐色粘質土層が堆積し、須恵器・土師器片が少量出土する。

S K 3 S K 2 の北西にあり平面楕円形に近い。直径1.25×1.45m, 深さ0.15mを測り形状はS K 2 に似る。出土遺物はない。

S K 4 S B 106 の北東約5mにあり、北半は水田構築時に削平されたとみられ消失する。平面隅丸方形に近く、長さ3.05×1.4m以上、深さ0.3mを測り、底部は平坦で東側は2段に落ち込む。埋土は黒褐色粘質土層を呈し、須恵器・土師器が約10点出土した。

• 土層断面色調一覧

第11図

S D 2

- ① 耕作土（暗灰色粘質土層）
- ② 床土（淡黄褐色粘質土層）
- ③ 淡灰褐色粘土層
- ④ 淡灰褐色細砂層
- ⑤ 暗褐色砂礫層
- ⑥ 暗褐色粘質土層
- ⑦ 暗褐色粘土層
- ⑧ 黑色粘土層（黒ボク）

S D 3

- ① 耕作土（暗灰色粘質土層）
- ② 床土（淡黄褐色粘質土層）
- ③ 暗灰褐色粘土層
- ④ 黑灰褐色粘土層
- ⑤ 暗黃褐色砂礫層
- ⑥ 黑灰色粘土層
- ⑦ 黑色粘土層（黒ボク）

S D 4・5・6

- ① 耕作土（暗灰色粘質土層）
- ② 床土（淡黄褐色粘質土層）
- ③ 淡褐色砂礫層
- ④ 黄灰褐色砂礫層
- ⑤ 褐色細砂層
- ⑥ 淡黑灰色細砂層
- ⑦ 明灰褐色粘質土層
- ⑧ 明灰色粘土層
- ⑨ 明灰色粘土層（黒っぽい）
- ⑩ 暗褐色粘土層（砂まじり）
- ⑪ 暗褐色粘土層
- ⑫ 黄灰褐色砂質土層
- ⑬ 黑色粘土層（黒ボク）

第12図

S D 7

- ① 耕作土（暗灰色粘質土層）
- ② 床土（淡黄褐色粘質土層）

③ 淡灰色細砂層

④ 明灰色細砂層

⑤ 暗灰色細砂層

⑥⑦よりやや明るい

⑦ 黑灰色細砂層

⑧ 淡黑褐色粘土層

⑨ 暗黄色粘土層

⑩ 灰褐色砂質土層

⑪ 灰色細砂層

⑫ 黑色粘土層（黒ボク）

⑬ 淡灰褐色小礫層

第13図

S D 1

- ① 耕作土（暗灰色粘質土層）
- ② 床土（淡黄褐色粘質土層）
- ③ 暗褐色粘土層
- ④ 淡灰褐色砂礫層
- ⑤ 暗褐色粘質土層
- ⑥ 黑色粘土層（黒ボク）

S D 8

- ① 灰色粘土層
- ② 黄褐色砂礫層
- ③ 明灰色粘土層（細砂ぎみ）
- ④ 明灰褐色粘土層
- ⑤ 明褐色粘土層
- ⑥ 黑灰色砂礫層
- ⑦ 淡黑色粘土層
- ⑧ 耕作土（暗灰色粘質土層）
- ⑨ 床土（淡黄褐色粘質土層）
- ⑩ 明灰色粘土層
- ⑪ 明灰色粘質土層
- ⑫ 淡灰色粘土層
- ⑬ 暗灰色粘土層
- ⑭ 黑色粘土層（黒ボク）
- ⑮ 暗褐色・黄褐色粘土混合層
- ⑯ 淡褐色細砂層

第4章 遺物

遺物は当該地のほぼ全域より出土した。出土遺物は須恵器約400点、土師器約250点、陶磁器約10点、鉄・銅製品各1点である。この中で実測可能なのは約50点を数え、時期的には古墳時代後期から平安時代前期にかけてのものと、室町時代後期のものである。ここでは、遺物を出土した遺構ごとに記述することにする。

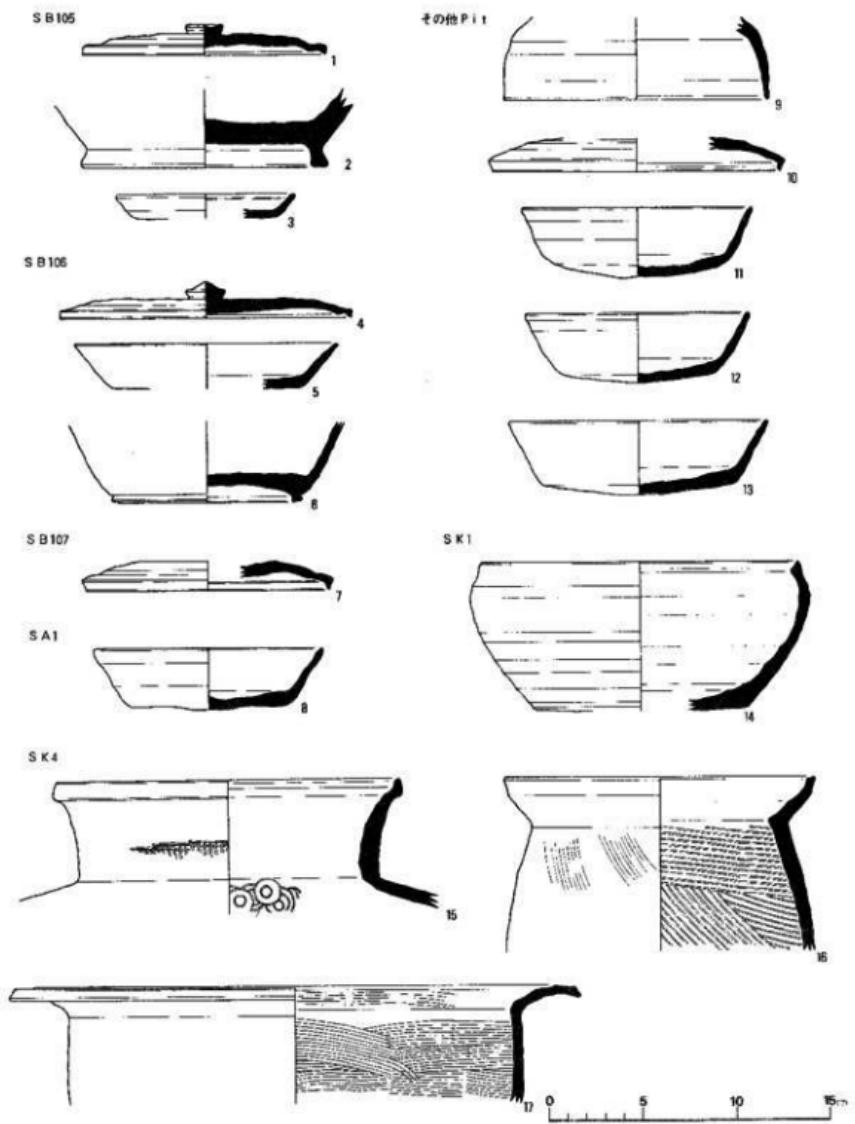
1 遺物 (第14~16図、図版26・27)

S B 105 須恵器(1・2)、土師器(3)がある。1は掘形より出土し、2・3は柱穴柱痕内より出土した。1は杯蓋で天井部は扁平でその中央に扁平な擬宝珠型のつまみがつく。口縁部は端部をいったん屈曲させ先端を下方へつまみ出す。全面横ナデ調整を施し内面中央を乱ナデする。口径13.0cm器高1.65cmを測る。胎土・焼成は良好で淡青灰色を呈する。2は壺の底部で、底部外周に外方へふんばる断面台形の高台がつく。器壁は厚い。胎土は良く、焼成は軟質で灰白色を呈する。

3は皿の破片で、口縁部を横ナデし端部内外面にゆるい段をもつ。底部外面は未調整で指圧痕を明瞭にとどめる。口径約9.5cm、器高約1.3cmを測る小型器である。胎土は良く焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

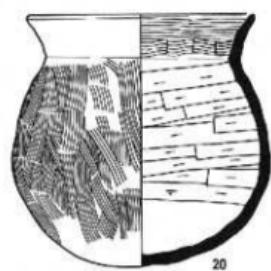
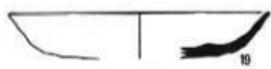
S B 106 須恵器3点(4~6)がある。4・5は柱穴掘形より出土し、6は柱痕より出土した。4は杯蓋で天井は1より扁平となり内面中央部は口縁端部の比高と変らない。天井中央に擬宝珠形のつまみをつける。天井部の1/2はヘラ削りの可能性があり、他は横ナデ調整を施す。口径15.5cm、器高1.95cmを測る。胎土は良好で長石粒を多く含む。焼成は良く青灰色を呈する。なお、口縁部端より約1cm内側に重ね焼きの痕跡をとどめる。5は平底の杯身で口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。胎土・焼成は良く、やや大粒の長石粒を含む。青灰色を呈する。6は高台付杯身で、高台は底部外周のやや内側に外方へふんばるように付け、断面は台形を呈し内邊が接地する。口縁部は内寄ぎみに外上方へのびる。内外面横ナデ痕を明瞭に残す。底部外面は未調整で粘土紐痕をみる。胎土・焼成は良く淡灰色を呈する。

S B 107 須恵器の杯蓋(7)が柱穴柱痕内より出土した。天井部は焼成時に窯変したのであろうか中央部は落ち込む。本来は丸味をもつたものであろう。口縁端部は下方へよ

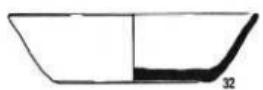


第14図 出土遺物実測図

方形圓溝狀遺構



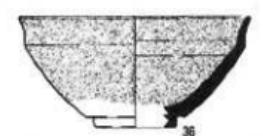
S D6



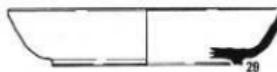
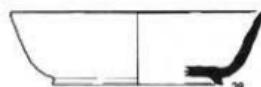
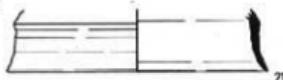
S D7



S D8



S D5



0 5 10 15m

第15圖 出土遺物実測図

く屈曲させ、先端は尖りぎみである。内外面横ナデ調整を施す。胎土は良く長石粒を多く含む。焼成はやや軟らかで暗灰色を呈する。

S A 1 新しい櫛跡の柱穴柱痕内より須恵器杯身(8)が出土した。平底の杯身で底部と口縁部の境界屈曲部は丸く、口縁部は一旦内弯し外反ぎみに端部にいたる。底部外面はヘラ切り後乱ナデし、他は横ナデ調整を施す。口径12.1cm、器高3.3cmを測る。胎土・焼成とも良好で、色調は内面淡灰色、外面青灰色を呈する。他に柱穴から細片が多数出土する。

その他柱穴出土土器 N区の建物以外の柱穴より出土した土器である。須恵器(9~13)等が出土している。9・10は杯蓋で、9は古墳時代後期のもので天井部と口縁部との境界屈曲部の棱はなくなり丸くなる。口縁端部を丁寧に横ナデする。胎土は良く焼成はやや軟質である。淡灰色を呈する。10は天井部が扁平となり、口縁部は端部を垂直に屈曲させる。天井部外面は丁寧に横ナデ調整を施す。胎土は良く、焼成は堅硬で淡灰色を呈する。11~13は平底の杯身で、11・12は丸味のある底部に、外上方へのびる口縁部をもつ。11の底部外面は未調整で他は横ナデである。口径12.1cm、器高3.8cmを測り、器厚はほぼ均一である。胎土は良好で長石粒を多く含む。焼成は軟質で灰白色を呈する。12の調整は底部内部を乱ナデし、外面に粘土紐の痕跡を明瞭に残す。他は横ナデ調整を施す。口径11.8cm、器高3.7cmを測る。胎土・焼成は11に似る。色調は淡灰白色を呈する。13は11・12より底部は平坦になり、口縁部との境界にゆるい棱がめぐる。調整は12と同じである。胎土・焼成とも良く淡灰色を呈する。口径13.7cm、器高4.0cmを測る。

S K 1 須恵器鉢(14)がある。14はいわゆる鉄鉢型といわれるもので、平底の底部に内弯する口縁部をもつ。口縁端部はよく内弯し、端部に内傾する面をもつ。底部外面は未調整で、他は横ナデ調整を施す。体部下位1/2はヘラ削りの可能性がある。口径16.8cm、体部最大径18.1cm、器高8.0cmを測る。胎土・焼成とも良好で長石粒を多く含む。淡灰色を呈する。

S K 4 須恵器甕(15)と土師器甕(16)、鉢(17)がある。15は外反しながら立ち上がる口頭部の先端を上方へつまみ上げたものである。口頭部中位に横ナデ後、荒いハケ状工具で縱方向に長さ1cm位の装飾を施す。体部内面に2~4条の円形浮文を残す。口径約18cmを測る。胎土は良く焼成は堅硬で淡灰色を呈する。

16はく字状に屈曲する口頭部に内弯する口縁部をもつ。口縁端面は内傾する。体部外面にハケ目調整を施す。口径約16.5cmを測る。胎土に砂粒・長石粒を多く含み、焼成は軟質で乳褐色を呈する。17は垂直に屈曲する頭部に横方向へのびる口縁部をもつ。調整は、

内面は横方向にハケ目を施し、外面は頭部のみハケ目調整後である。口縁端部は内外面とも横ナデ調整を施す。口径約30cmを測る。胎土は良く焼成は軟質である。色調は口縁内面のみ淡赤褐色と呈し、他は乳褐色である。

方形周溝状造構 須恵器杯蓋（18）、杯身（19）と七輪器甌（20）とが出土した。18は平坦な天井部の先端を垂直に屈曲させ口縁部とする。口縁端部は尖りぎみである。内外面横ナデ調整を施し、天井部の中央はヘラ削りの可能性がある。口径約15cmを測る。胎土・焼成とも良好で淡灰褐色を呈する。19は平底の杯身で、底部は丸味をおび口縁部との境界は不明瞭である。口縁部はよく開く。底部内面のみ乱ナデし、他を横ナデ調整する。胎土・焼成とも良好で青灰色を呈する。20は球形の体部に少し開く口縁部をもつもので、口縁端部は丸くおさめる。外面はハケ目調整を施し、II縁部のみ後でなでる。内面は口縁部をハケ目調整後かるくなれ、体部は横方向にヘラ削りする。口径12.0cm、体部最大径13.2cm、器高13.3cmを測る。胎土は良く少量の砂粒、長石粒を含み、焼成は軟質で明褐色を呈する。

これら18～20は溝内から出土したのであるが、出土状況をみると土器を出土した部分の遺存度は極度に低く、上層の遺構に伴った遺物が、溝部に存在したものと考えられる。

S D 5 須恵器杯蓋（21～25）、杯身（26～29）、甌（30）と七輪器杯身（31）が出土した。21は古墳時代の蓋で、天井部と口縁部の境界は明瞭な棱をもつ。口縁部はよく外反し端部は尖る。口縁内外面は横ナデ調整を施す。胎土・焼成とも良好で暗灰色を呈する。22は平坦な天井部をもつもので、II縁部は垂直に下方へ屈曲させ、断面三角形を呈する。内外面横ナデ調整を施し、天井部の約1/2はヘラ削りの可能性がある。胎土は良好で2～3mmの長石粒を含む。焼成は良好で暗灰褐色を呈する。23は丸味をもつ平坦な天井部の先端を下方へ屈曲させ口縁部としている。口縁端部は断面三角形を呈する。全面横ナデ調整を施す。胎土は多く多量の長石粒を含む。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈し天井の一部に自然釉が付着する。24も平坦な蓋で口縁部は一旦屈曲し、端部をわずかに垂下させる。いわゆるS字状を呈する。内外面横ナデ調整を施す。胎土・焼成は良好で長石粒を多く含む。灰色を呈する。25は有蓋高杯の蓋のつまみで、中央がよく凹む。胎土は良好で長石粒を多く含む。焼成は堅穢で灰色を呈する。26は平底の杯身で、底部と口縁部の境界は丸味をおびる。底部中央は上げ底状になる。底部外面はヘラ切り後未調整で、他は横ナデ調整を施す。口径13.4cm、器高3.6cmを測る。胎土は良好で長石粒がめだつ。焼成は軟質で淡灰色を呈する。27～29は高台付杯身で、27は底部外周いっぱいに内湾する高台をつける。口縁部は直線的に外上方へのびる。底部外面に粘土経痕を残し、II縁部内外面は横ナデ調整である。口径14

.5cm、器高5.0cmを測る。比較的大型品である。胎土・焼成はともに良く2~5mmの長石粒を多く含む。青灰色を呈する。28は底部外周の少し内側に高台を付け、高台は外方へふんばる。内外面横ナデ調整を施す。胎土・焼成は良く、長石粒を多く含む。色調は淡灰色を呈する。29は28とよく似た形態をもち、高台は全面が接地する。底部内面に自然釉が付着する。胎土・焼成は良く長石粒を多量に含む。淡灰褐色を呈する。30は壺の底部で、高台は底部外周いっぱいに外方へふんばるよう付ける。断面台形に近い。内面に横ナデ痕を明瞭に残す。胎土・焼成は良く長石粒を多く含む。色調は灰色を呈し、高台部分に自然釉が付着する。

31は平底の上部器身で、底部と口縁部との境界は丸く、口縁端部を肥厚させ先端を丸くおきめる。胎土は良好で焼成はやや軟質である。色調は外面淡黄褐色で内面白褐色を呈する。口径12.5cm、器高2.7cmを測る。

S D 6 須恵器杯身 (32) がある。平底の杯身で底部と口縁部との境界は明瞭で、口縁部は直線的に外上方へのびる。底部外面に粘土紐痕を残し、他は丁寧に横ナデする。口径13.1cm、器高3.6cmを測る。胎土・焼成は良く長石粒を多く含む。淡青灰色を呈する。

S D 7 須恵器杯身 (33) が出土する。立ち上がりをもつ杯身で、立ち上がりは短くよく内傾する。器高は低い。胎土・焼成は良く長石粒を多く含む。色調は青灰色を呈し、外面に鉄物が付着する。

S D 8 須恵器杯蓋 (34)、灰釉陶器 (35)、天日茶碗 (36) がある。この遺物はいずれも溝底部の同一層より出土した。34は口縁部をS字状に屈曲させるもので、天井は平坦である。胎土・焼成は良く長石粒を多く含む。淡灰色を呈する。

35はおそらく壺の底部と思われ、底部外周に低い高台が付く。施釉は内面底部近くまで施し、釉色は淡緑色を呈する。素地は灰白色である。胎土・焼成は良い。

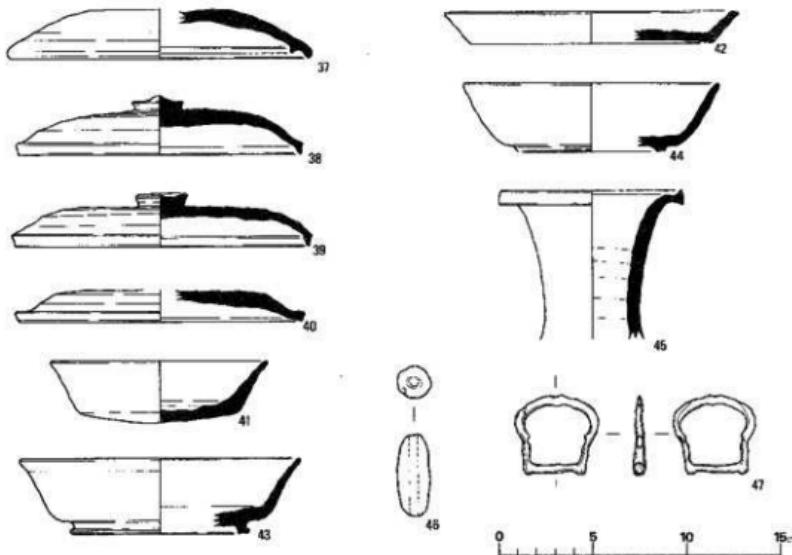
36は口頭のよく外反するもので、口縁先端より1.5cm下にはっきり稜をつける。高台は大部分欠失し詳細は明らかではないが削り出し高台と思われる。施釉は茶灰褐色を呈し、素地は淡赤褐色である。口径12.2cm、器高5.9cmを測る。胎土は良く、焼成は堅緻である。なお、同層からは土釜の脚部片と染付茶碗片とが出土している。

包含層出土遺物 N区を中心に包含層より多量の遺物が出土した。その中で、器形の明確なものを取り上げ記述する。

須恵器杯蓋 (37~40)、杯身 (41~44)、壺 (45)、土鍤 (46)、銅製品 (47) 等があり、他に器形不明鉄製品がある。

37は口縁端部内側にかえりをもつ蓋で、かえりは口縁端部より突出しない。天井は丸味をおびる。残存部全面横ナデ調整を施す。口径約16.0cmを測る。胎土・焼成は良く、色調は外面残存部全体に淡緑色の自然釉が付着し、内面は灰褐色を呈する。38・39は天井部に丸味を残し、口縁端部を垂下させる蓋で、天井中央に擬宝珠形のつまみをつける。38は口径15.0cm、器高3.3cm、39は口径15.6cm、器高2.8cmを測る。ともに胎土・焼成は良く、淡青灰色を呈する。38の胎土には長石粒が少鼠含まれる。40はSD8出土の31に似る蓋で、口縁部の屈曲率は低い。胎土は良く焼成は堅緻で、淡赤灰色を呈する。41は平底の杯身で丸味をもつ底部と外反する口縁部から成る。底部と口縁部の境界はわずかに棱をもち、その部分のみ器厚になる。口縁部は横ナデ調整を施す。口径11.5cm、器高3.3cmを測る。胎土・焼成は良く長石粒が多く含む。淡青灰色を呈する。42は皿状を呈する杯身で、口縁部は短く端部に外傾する面をもつ。底部はハラ切りのままで、内面は乱ナデし、口縁部は横ナ

包含層



第16図 出土遺物実測図

テ調整を施す。口径約15.0cm、器高1.7cmを測る。胎土は良く焼成は軟質で、白灰色を呈する。43・44は高台付杯身で、43の高台は底部外周の内側に付け、外端を外方へよくつまみ出す。口縁部はよく外反する。口縁部は横ナデ調整し、底部内面を乱ナデする。口径約14.9cm、器高約4.0cmを測る。胎土・焼成は良く2mm程度の長石粒を少量含む。淡灰色を呈する。41の高台は低く、内端が接地する。底部と口縁部の境界は丸味をおびる。胎土・焼成は良く、長石粒を多く含み淡灰色を呈する。45は壺の口頭部で、体部以下は欠失する。頭部は外反しながらのび、口縁部はラッパ状に開き端部を上下に肥厚さす。内面に横ナデ痕を明瞭に残す。胎土は良く長石粒を多く含む。焼成は堅緻で淡灰色を呈する。口縁内外面に灰褐色の自然釉が付着する。

46は管状を呈する土錐で、縱断面は稍円形をなす。直径1.7×1.8cm、長さ4.4cm、重量13.3gを測り、色調は黒灰褐色を呈し土師質である。

47は帯金具でいわゆるパックルである。中央の止め具は欠失する。長さ4.2cm、最大幅4.4cmを測る。銅製品である。N-1区中央西側より出土した。

2 小 結

今回出土した遺物について、その遺物のもつ器形等の特徴から時期を検討してみよう。その中で、比較的他の遺跡と対比可能な須恵器を中心にみると、大きく5時期に分けられる。すなわち、古墳時代後期から末期の6世紀後半から7世紀初頭の時期。白鳳期・藤原期から奈良時代にかけての奈良時代前期の時期。奈良時代前半を中心とした8世紀前葉から中葉にかけての時期。その後の奈良時代後半の8世紀後半の時期。そして奈良時代から平安時代にかけての8世紀末から9世紀の時期である。この5時期を便宜的にI～V期と呼称し分類すると下記のようになる。

I 期 杯蓋の9・21・25と杯身の33がこの時期に相当する。この時期の上器は後期古墳群に多く副葬され、同種・同形態のものは当遺跡東方の上野古墳群^①、金剛寺野古墳群^②からも出土している。さらに、高坪山遺跡の窯跡からは類似する土器が出土し、非常に注目される位置関係にある。ただ、軽野正境遺跡の住居跡出土遺物は当時期より1段階古い要素をもつ。

II 期 杯蓋7・22～24、37～39と杯身6・11～13、43・44がある。中でも37・41・43は他より古い形式をもち白鳳期のものといえ、櫻木原編年Ⅲ類3段階に相当する。また、43の高台は蒲生町岡本窯跡出土の杯身高台と極似しており、湖東地方の土器分布を知る良

好な資料といえよう。38・39はかえりをもたない蓋で、藤原京の時期よりやや遅れて出土する土器である。^⑦ 7・22~24は38・39より時期は少し降るものとみられるが、Ⅱ期に含めてよいものであろう。

III期 杯蓋10・18、杯身19・27・28・32、鉢14がこの時期にあてはまる。杯蓋はⅢ期より扁平となり、杯身は直線的な口縁部をもつ。鉢形土器14はこの時期に含まれる。これは陶邑編年IV型式2~3段階、櫻木原編年IV類2段階に相当し、8世紀中葉頃といえよう。

IV期 杯蓋34・40、杯身5・8・29がある。杯蓋の口縁部がS字状により屈曲する時期で、また、杯身の高台はⅢ期より小型化する。陶邑編年IV型式3段階頃に類似品を求められ、近江国守間速遺跡より多く出土する土器である。さらに、古代郷倉跡とされている今津川弘川遺跡からもこの時期の土器が比較的多く出土する。

V期 杯蓋1・4、杯身42(皿)、蓋45があり、杯蓋はより扁平化する。42の皿および蓋45は陶邑編年IV型式4段階に類似を見、長岡京より一括して出土する土器に同種のものがある。よって、8世紀末から9世紀前葉に比定することができよう。

つぎに土師器をみると、蓋20は藤原京の壺Aに類似し、体部内面を軽くヘラ削りする特徴から大和あるいは河内地方出土品に類似を求めることができ、その関係が注意される。^⑧ 7世紀後半から8世紀初頭に比定できよう。杯31は径高指數22前後を示し、口縁部を横ナタ調整するのみであることから、奈良時代後半頃のものと考えてよいであろう。

註

- ① 近藤 滋「秦荘町上牧野古墳群」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-1 滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和52年)
- ② 出中勝弘・近藤 滋「愛知郡秦荘町コヨ敷地内古墳調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度 滋賀県教育委員会 昭和50年)
- ③ 近藤 滋・松沢 修「愛知郡秦荘町高坪古窯跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度 滋賀県教育委員会 昭和52年)
- ④ 近藤 滋・石橋正嗣・石原道洋「軽野正境遺跡発掘調査報告書」(秦荘町教育委員会 昭和54年)
- ⑤ 林 博通・萬野泰樹他「櫻木原遺跡発掘調査報告」Ⅲ(滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和56年)
- ⑥ 近藤 滋・松沢 修「瀬生郡瀬生町・日野町宮川・岡本・大谷古窯跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度 滋賀県教育委員会 昭和52年)

- ⑦ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 昭和53年)
- ⑧ 中村 浩「陶邑」Ⅰ～Ⅵ(『大阪府文化財調査報告』第28～31輯 大阪府教育委員会 昭和51～54年)
- ⑨ 前掲書⑤
- ⑩ 前掲書⑧
- ⑪ 滋賀県教育委員会「史跡近江国御跡発掘調査報告」(『滋賀県文化財調査報告書』第6冊 昭和52年)
- 林 博道・葛野泰樹「瀬田堂ノ上遺跡発掘調査報告」Ⅱ(『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度 滋賀県教育委員会 昭和52年)
- 葛野泰樹「大津市南郷古墓跡群について」(『滋賀県文化財だより』No.40(財)滋賀県文化財保護協会 昭和55年)
- ⑫ 田中勝弘「弘川遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和54年)
- ⑬ 前掲書⑧
- ⑭ 京都府教育委員会「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概要』1976 昭和51年)
- 高橋美久二「長岡宮跡第61次発掘調査概要」(『京都考古』第17号 昭和50年)
- 百瀬正恒「長岡京の土器(3)」(『京都考古』第19号 昭和51年)
- ⑮ 前掲書⑦

第5章 考 察

1 建物の配置と時期

今回検出した掘立柱建物 S B102~108の方位はほぼ南北方向に揃えている。細かくみると、最も東へ振る S B108はN13°23'Eで、最も西へ振る S B105はN4°07'Wを示し両者間に17度30分の差異をみる。ここで、各建物の方位関係を求めるに、S B107・108は3度30分の差をもち、同位置に重複して存することから、建て替えたものとみてよいであろう。この建物に近い方位をもつものはS B104でS B107より5度10分西へ振り、つぎのS B106はS B104より東へ5度振り。S B106・102・103は1度の間隔をもつほぼ同一方位をもつ。S B105はS B103より1度40分さらに西へ振り。柵跡S A 1はS B 102と最も近似した方位をもち、柱穴の接するS B105よりS B103に平行する。このようにみると、S B107・108の一群、S B104の一群、S B106・102・103・105、S A 1の一群に方位から3群に大別できる。

つぎに、建物より出土した遺物をみると、S B107には上器編年のⅡ期が含まれ、S B106からはⅡ~V期が出土し、S B105はV期を含む。S A 1からはⅣ期の土器が出土している。ただ、これら遺物は建物に伴うとはいって、出土量が極めて少量化であるため時期決定に信憑性を欠く。ともあれ、出土遺物からあえて建物の存在時期を推定すると、S B107→S B106(S A 1)→S B105の順序になる。この年代推移を先ほどの建物方位に考え合わせると、S B107・108の一群は時間差なく建て替えたとみて土器編年のⅡ期に、S B106・102・103の一群はⅣ期に、S B105はV期の遺物を出土することからS B105と同一方位をもつ一群をV期にそれぞれ相当するとと思われる。

さらにS B107とS B106の中間方位をもつS B104をⅢ期に想定し、方位からは明確に区別できないS B105を出土遺物からS B106の群より後出する建物と区分して考えることはできないであろうか。

上記のことから建物は、Ⅱ期(N9°53'E・N13°23'E:S B107・108)→Ⅲ期(N4°43'E:S B104)→Ⅳ期(N0°17'W~N2°27'W:S B106・102・103, S A 1)→V期(N4°07'W:S B105)のように時代とともに方位を東から西へ順次移動させているようにみうけらる。

このような同一遺跡内での建物方位における時代的推移は、高島郡新旭町の美園遺跡⁽¹⁾、同郡今津町弘川遺跡⁽²⁾で明らかにされているように、官衙関係遺跡で多くみられる現象であ

る。当遺跡の位置をみると、「和名抄」でいう八木莊にあたり、愛知郡における古代寺院跡のほぼ中央部に位置する。大間寺遺跡の所在する島川は旧島川村のち八木莊と称し、役場が置かれ、古くは宇曾川を利用した穀物運搬船がこの島川まで来ていたと聞く。このように、島川は秦莊町における政治的役割は大きく、それをそのまま遡るとみるならば、今回検出した造構を公的な施設と考えることは可能と思われ、大間寺遺跡の性格は意義高いものとなる。

では、これら建物はどのような性格を有していたのであろうか。配置的には調査面積の限定から、同一時期の建物の立地関係を明らかにすることはできないが、東柱の有無から S B 102・105~107 は倉庫的様相を呈し、S B 103 は S A 1 との位置関係から倉庫とは別の建物を想定する必要がある。また、建物群の立地する場所は大間寺遺跡の北隅にあたり、人々の直接の居住あるいは生活空間と考えるより、大間寺遺跡に在住した人々に関連する倉庫群と推測することは過言ではないであろう。

なお、S 区より検出した S B 101 は方位・規模等に N 区掘立柱建物群の特徴と共通性を求めるることはできず、まったく、時期を異にする建物といえよう。方位は N43°23' E を示し、愛知郡条里制地割とほぼ一致する。時期は出土遺物がないため、存在年を把握することは困難であるが、柱穴の規模から推測すると平安時代後半より遡ることはないとと思われる。

2 溝 の 性 格

S 区より検出された溝は、第 3 章で述べたようにⅢ 形式に分けられる。その中で、Ⅰ 形式に属する S D 2 は S B 101 より新しく、水田床面直下より検出されたことより、同じⅠ 形式の S D 4~6 より時期は新しいものである。S D 5・6 は溝内から土器編年のⅠ 期からⅢ 期の上器を出土し、少量ながらⅣ 期に属するものを含んでいる。奈良時代後半頃まで存続していたとみてよう。なお、S D 5 は S D 4 と重複し、両者ともよく似た形状を呈することから、S D 5 は造り替えたとみてよいであろう。

この S D 5 および S D 6 は心々距離約 2 m をもち東西方向に平行してのび、東延長上には小字大円寺を 2 分する畦畔にあたる。この大円寺中央の東西畦畔が旧来からの位置を踏襲したものとするならば、S D 5・6 は古条里制地割とまったく方向を同一にすることになる。さらに現畦畔は畦道および排水路もを兼ねており、重要な畦畔であるといえる。このことから、S D 5・6 の 2 本の溝はその規模・位置関係から側溝的性格をもつように思われ、両者によって区画された幅 2 m の空間を道路跡と考えることはできないであろうか。

S D 8 については、出土遺物から中世末期の溝とみられ、当島川に遺存する島川遺跡である城跡（南殿城、北殿城跡）に関連するものと思われるが、いま一つ資料不足であり今後の調査に期するところが大である。

3 おわりに

今回の調査は、道路予定地のみを対象としたため遺跡の全貌を解明することはできなかつたが、大間寺遺跡の一部を明らかにしたといえよう。ここでその要点を記すると以下のようになる。

検出された掘立柱建物 S B102～108、推定道路跡（S D 4～6）は愛知郡における古条里制地割と呼称されている南北地割に方位を揃えており、時期的には7世紀末から9世紀前葉にかけて存在したものといえる。また出土遺物の中に7世紀第3四半期に属するものも含まれることから、いわゆる大津宮時代に相当する建物があったと考えることは可能で周辺の寺院跡との関係が注目される。また、周辺の同時代の遺跡から多量に出土する瓦類は、当遺跡では皆無で、大間寺遺跡の性格を究明する上で重要な手懸かりとなろう。

しかし、当郡に居住していたといわれる依智秦公一族や奴野氏といった氏族と、湖東地方の古代における開発状況を解明する重要な課題を、今回の調査では明らかにことができなかつたが、当遺跡を含めた周辺の同時代の遺跡が有していると思われ、巨視的な視野のもとでの研究が必要である。今回の調査はその一端を明示したといえるであろう。

註

- ① 林 博通・松浦俊和・宮成良佐・葛野泰樹『美園遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会 (財) 滋賀県文化財保護協会 昭和50年)
- ② 田中勝弘『弘川遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会 (財) 滋賀県文化財保護協会 昭和54年)

図版一 遺跡



大間寺遺跡周辺航空写真

1 大間寺遺跡 2 野々目廃寺 3 畑田廃寺



1 調査地遠景（東から）



2 調査地全景（北から）



1 N区（南から）



2 S区（北から）



1 N-3区(南から)



2 N-2区(北から)



1 N-1区（北から）



2 S-1区（南から）



1 SB1 (南から)



2 SB101-SD2 (東から)



1 N-1 区建物群（南東から）



2 SB102（南から）



1 SB103 (東から)



2 SB1・SB103-104 (南から)



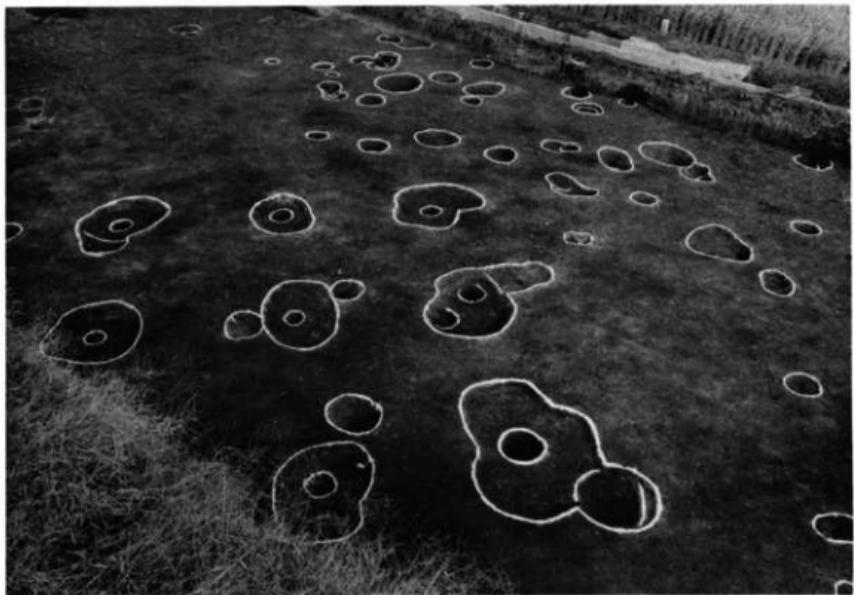
1 SB105 (南から)



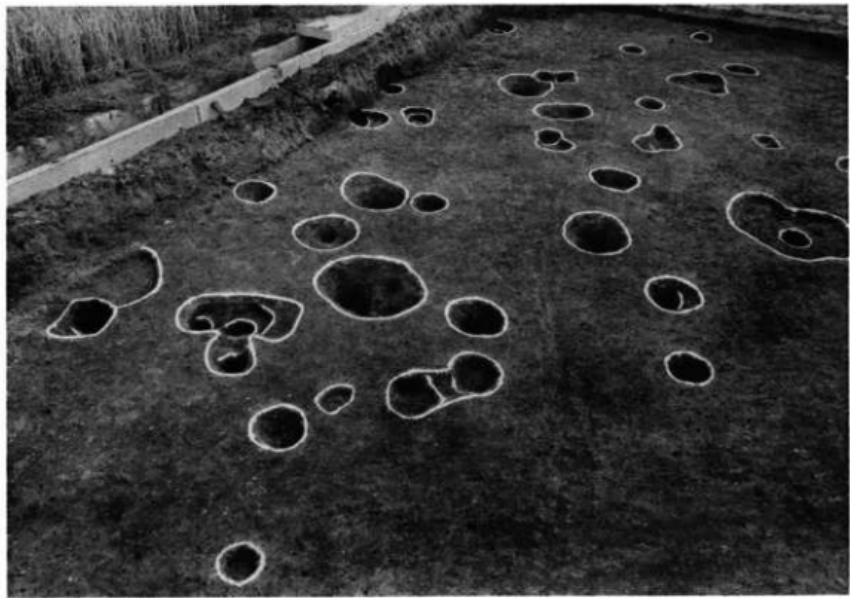
2 SB106~108 (南から)



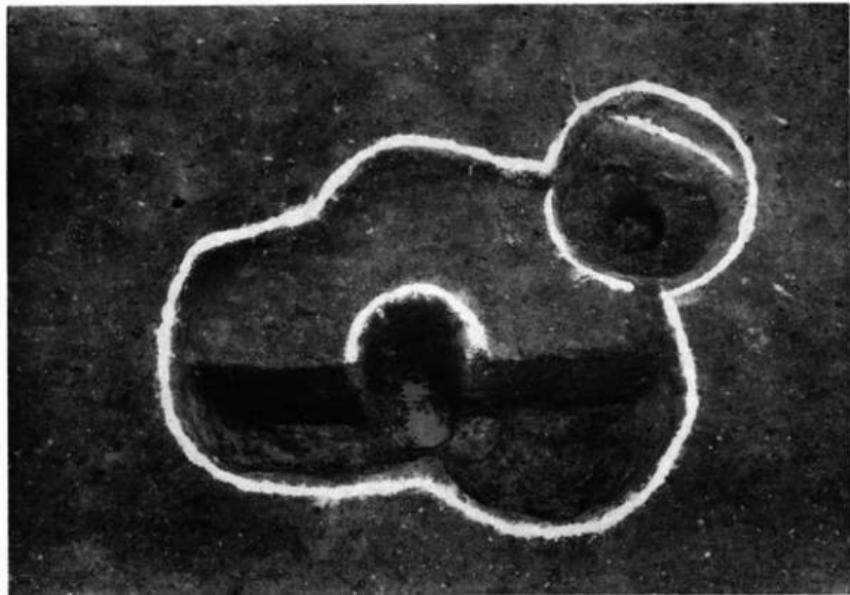
1 SB106(東から)



2 SB106~108(西から)



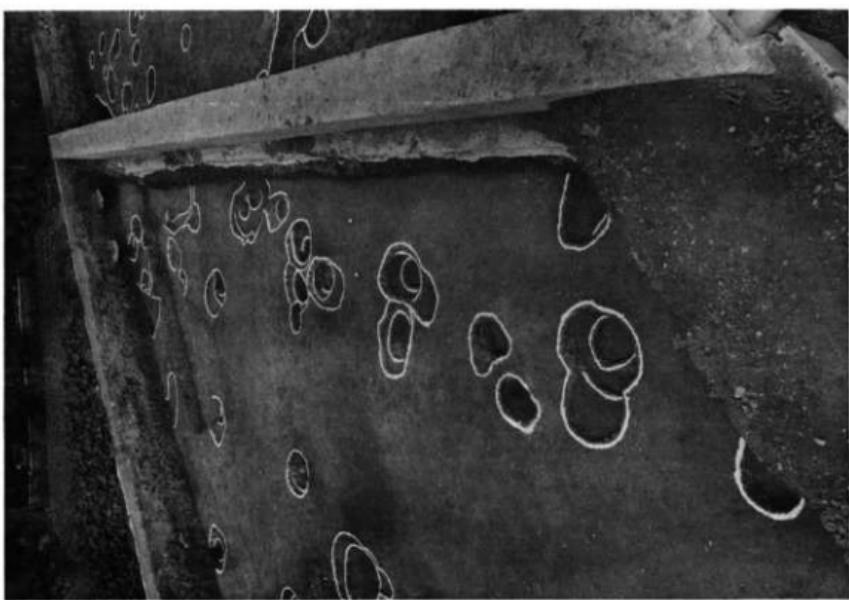
1 SB107・108 (北から)



2 SB106 柱穴断面 (北から)



1-SAI (西から)



2-SAI (東から)



1 方形周溝状遺構（北から）



2 方形周溝状遺構 SK-1（西から）



1 SK2・SK3



2 SK4 (東から)



1 SD I (東から)



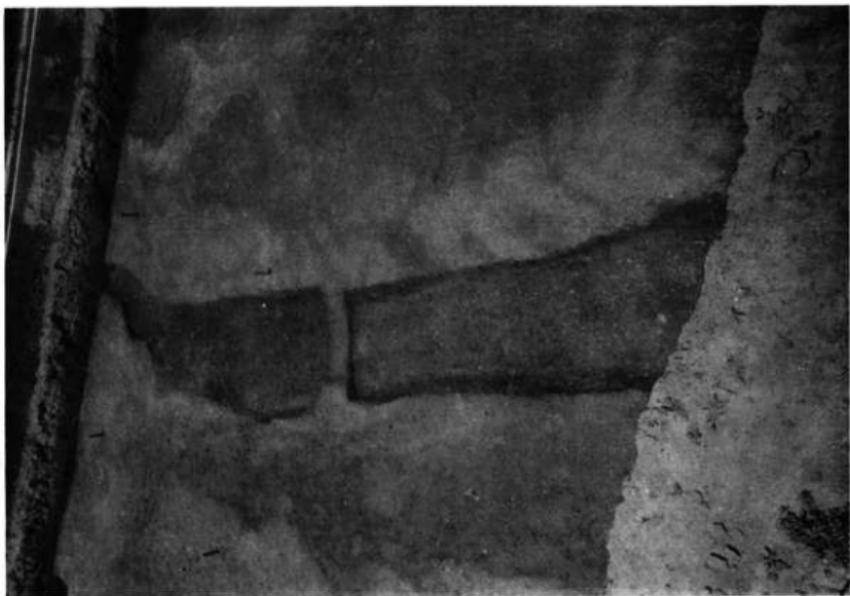
2 SD I (北から)



1 SD4・SD5 (東かん)



2 SD6 (東かん)



1 SD7 11層(深さ15)



2 SD7 11層(深さ15)



1 SD 8 (北から)



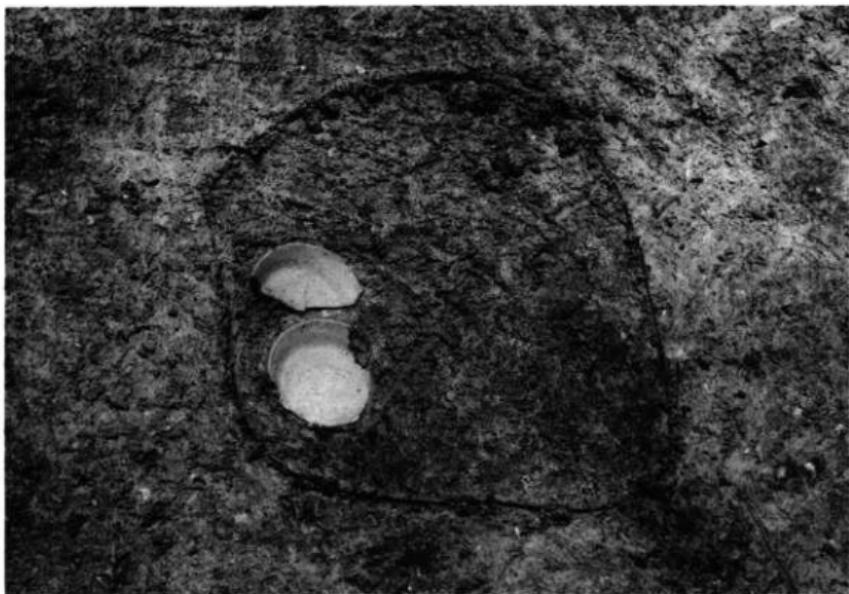
2 SD 8 (南から)



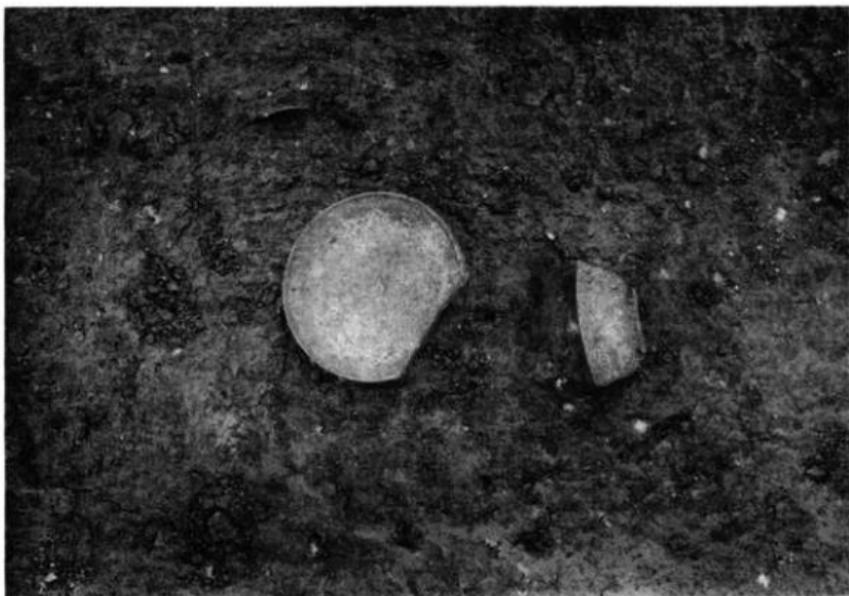
1 SD4・SD5 断面（東から）



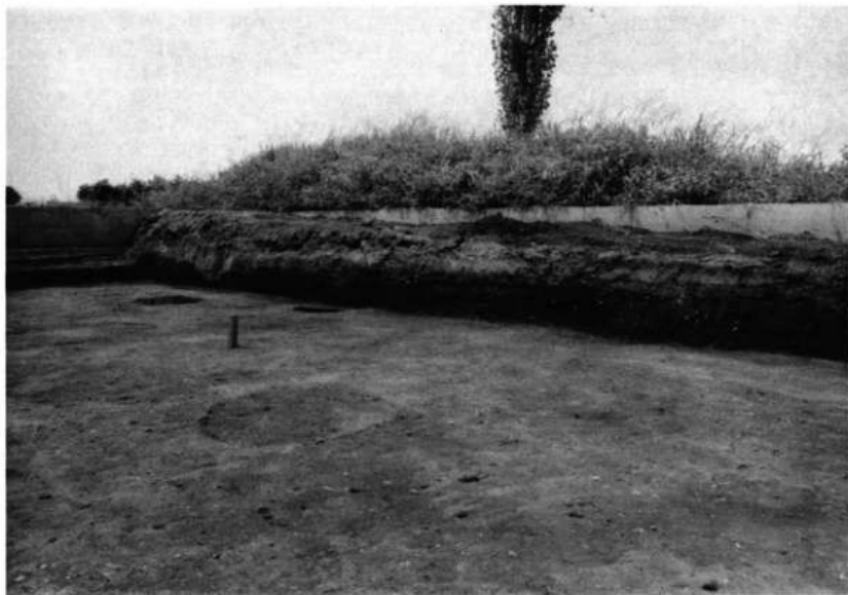
2 SD8 断面（東から）



1 N-2区 柱穴からの遺物(14・15)出土状況



2 N-2区 包含層からの遺物(24・26)出土状況



1 N-3区 トレンチ断面（東から）



2 N-2区 トレンチ断面（東から）



1 N-1区 トレンチ断面（東から）



2 S-1区 深掘部分断面（東から）



1 S-2区 深掘部分断面（東から）



2 造跡保存の敷砂状況



1 敷砂完了状況



2 保護マット敷つめ状況



1 保護マット敷つめ完了状況



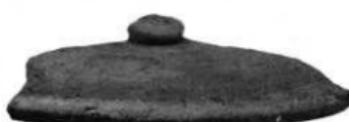
2 保存完了状況



1



14



4



6



8



20



11



31



12



22



13



23

1・3 SB105, 4・6 SB106, 8 SA1, 11~13 その他のPit, 14 SK1, 20 方形周溝状造構
22・23・31 SD5



26~29 SD5, 32 SD6, 35 SD8, 37~39·41·43·45·47 遺物包含層

昭和57年3月

大間寺遺跡発掘調査報告書

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社

京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075) 351-6034

68-C